家庭雜誌

第四拾五號

明治廿八年を迎ふ　空前の新年を迎ふる空前の覺悟なかるべからず。

雪と氷　何ぞ其變相の種種なる。

妹横井つせ子の永眠を悼む　友情掬すべく、追慕意至る。

叔母君横井つせ子　實に小楠横井先生の室なり。

一家の經濟　主婦の最も記臆すべき事。

従來ノ講義ハ正科久原躬弦今村有隣松本源太郎小中村義象井上十吉ワルツコックス及チ氏マ氏高津松田鈴木山口熊澤栗野北條吉田落合飯島篠野ノ各博士學士又補科ハ元良勇次郎三好學五島清太郎ザール及足立小方長澤坪内高田和田垣花輪瀏橋珍田濱田上田天野家永上野島田中村森内藤趾叟ノミナリシカ今般海陸軍補生。高等文官。中師教員。受驗者ノ爲學會商舘ニ結合シ從來ノミニテ足ラザル學科ヲ補充シ又技手測圖手受驗ノ爲文部省御編集ノ工學書及測量書測圖書ヲモ附加發賣ス而シテ合本ノ增設科目ハ語學海軍士官某數學田中矢德倫理ドクトル中島力造物理學博士北尾次郎動物仝石川千代松植物仝齋田功太郎國學木村正辭漢學三島毅ノ諸大家ニシテ英科ヲ一例セバ會話作文ロングマンナショナルユニオン各讀本スヰントン萬國史ヘスチング。クライブ。ラセラス。セノビヤ。ベーコン。シーザー。ミルトン。各傳美氏失樂園アーピング。小品アイバンホー。湖上之美人イノック。ヒューム英國史ウルジニヤ政體論干涉論マ氏沙翁諸大家ノ直譯解釋ノミカ原語ニ迄フリ假名セリ又合本ハ文字ヲ小ニシ字數ヲ增シ紙數ヲ減セシモ尚一四大版及四六版千七百三十頁挿圖百三十七工科ハ千四百七頁圖式一卷ヲ添フ本書購讀者河野市熊岡田滋沼ハ中學教師ニ及川竹次宮坂昂ハ慶應大學ニ藤井宏外五名ハ文官試驗ニ平仁太郎外十三名ハ官立校に野尾外三名は税關吏ニ外山覺伊東正三工藤哲郎畑萬藏伊集院弘(鹿兒島)石黑源三兒玉治郎井桁秀男ハ陸軍書記ニ中野安義小笠滿藏ハ技手ニ執レモ合格其他師範教師海陸軍鐵道電信衛員若干人故ニ本年四月施行海陸士官主計候補生及技手採用試驗ニ必要ナル以所及東北ノ野ニ斯ル改版補充發賣ノ大備ヲ掌提スル所以ハ自ラ瞭也殊ニ補助員(賛金)讚助員(賛金外)ニハ従五位大隈秀麿華族佐藤昌太郎從四位博士末松謙澄海軍大學次長大佐山本淑義華族中島喜次郎仝佐々宇右衛門文學博士元良勇次郎試驗官北尾次郎仝芦野敬三郎仝横井忠直本院長ドクトル舍熊(他院員ハ除ク)及海軍中將赤松則良陸軍中將三浦梧樓從三位加藤弘之從四位西村茂樹其他帝國大學各高等校ヨリ第二師團ニ至ル迄讚助員百七十三名ヲ有ス又貸生五百名限リ代金二圓拂込法ヲ設ケ一圓五十錢送料十八錢ニテ語學書及數學國語講義ヲ送ル但至急ヲ乞申込所岩手縣東和賀郡谷内二番地興學院出版部宛爲替ハ土澤局

四版 高等中學講義合本

實價四圓七拾錢郵税三拾六錢但二月二十八日限三圓外ニ郵税三拾六錢

- 國民叢書 人物と管見 定價拾五錢 郵税二錢
- 國民叢書 青年教育 定價拾五錢 郵税四錢
- 國民叢書 靜思餘録 定價拾五錢 郵税四錢
- 國民叢書 文學斷片 定價拾五錢 郵税四錢
- 國民叢書 天然と人 定價貳拾錢 郵税四錢
- 吉田松陰 定價五拾錢 郵税八錢
- 新日本之青年 定價貳拾錢 郵税四錢
- 誕生日 定價拾五錢 郵税貳錢
- 一語千金 定價五錢 郵税貳錢
- 第一國民小說 定價拾五錢 郵税四錢
- 第二國民小說 定價拾九錢 郵税六錢
- 第三國民小說 定價拾五錢 郵税四錢
- 第四國民小說 定價拾五錢 郵税四錢
- 歸省 定價拾五錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

○○○國民之友新年大附錄 一月十三日發兌第二百四十四號に添ふ ○○○

●首陽山の大景　遲塚麗水

深夜黑山の虎吼を聽く何ぞそれ凄絶壯絶なるや

硝煙彈雨にのみ醉ふて天然を味ふの暇なきもの滔々皆是れなり

首陽山の大景を叙し來りて一篇無韻の詩を成すもの豈その餘裕を示さずとせんや

●靈鷹高千穗　戸川殘花

千古の好詩題は俗吏の筆に汚されたり眞箇に人をして恨殺悶殺せしむ

眞詩人は出で來れり

格調高雅精彩奕々始めて靈鷹の靈を發揮し他の俗吏をして顔色なからしめたり

●豫備兵　松居松葉

悲劇！

徵發令は下れり愛兒を托するに所なし而も從軍せざれば軍律に照らさるべし彼が心情は亂れて麻の如く愛兒を終に殺して從軍せり

慘絶痛絶讀者の腸を寸斷す

●戊辰のむかしかたり　小金井きみ子

優雅典麗の文字、二十八年の昔を回顧して詩歌的に叙寫す能く當年を記臆する者之を讀めば今昔の感に堪へざるべく當時を知らざる少年と雖ども無限の感を催すべし

●鶴が無事　湖處子

是れ第二軍從軍兵士の慈母が旅順口陷落の後愛兒無事の報を得て叫びたる歡天喜地の聲なり著者が軍人及び其家族に對して表する同情の如何に深厚なるかを見よ

發行所　東京京橋區日吉町　民友社

國民新聞

定價一ヶ月三十五錢 郵税一ヶ月十三錢

國民新聞の本領は不羈獨立にして政黨政社の機關にあらず。故に其立論拘束せる所なく雄抜にして正大也。大膽にして森嚴也。

國民新聞は内に責任内閣を確立し外に自主的外交主義を貫徹し以て健全なる膨脹的大日本を世界に樹立するを任とす。

國民新聞は第一より第七に至る凡ての議會に顯はしたる特色を一層本議會に於て發揮せんことを期す。第八議會は閑に似て決して閑ならず經濟上軍國事務上大に注意すべきもののあるを知ればなり。

國民新聞の日清戰爭に力を用ひたること及現在用ゐつゝあること讀者の已に知れる所也。現今特派員の人名及方面實に左に擧ぐるが如し。

第一軍(在滿州大孤山)	松原岩五郎
第二軍(滿州金州半島)	久保田金僊
續發從軍	古谷久綱
同	塚越重三郎
海軍(在渤海千代田艦)	國木田哲夫
大本營(在廣島)	阿部充家
同	平田久
同	横澤三次郎
朝鮮國京城	天涯生
同 仁川	愛民生
同 釜山	鑑湖生
第二軍別派通信	枕戈生
在旅順口	雨舟隱士

右の外其の姓名を掲ぐべからざる特別通信者頗る多し
是れ紙面の殊に通信に富む所以なり

發行所 東京京橋區日吉町 國民新聞社

グラッドストン	定價貳拾錢 郵税四錢
武雷土	定價拾五錢 郵税四錢
格武電	定價貳拾錢 郵税四錢
格朗空	定價貳拾錢 郵税四錢
伊太利建國三傑	定價貳拾錢 郵税四錢
幕府衰亡論	定價卅五錢 郵税六錢
新日本史 上	定價四拾錢 郵税六錢
新日本史 中	定價三拾錢 郵税六錢
最暗黒之東京	定價拾參錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せず、見本は郵劵五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵劵代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割増

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價

一冊	金五錢	地方郵税共 金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢

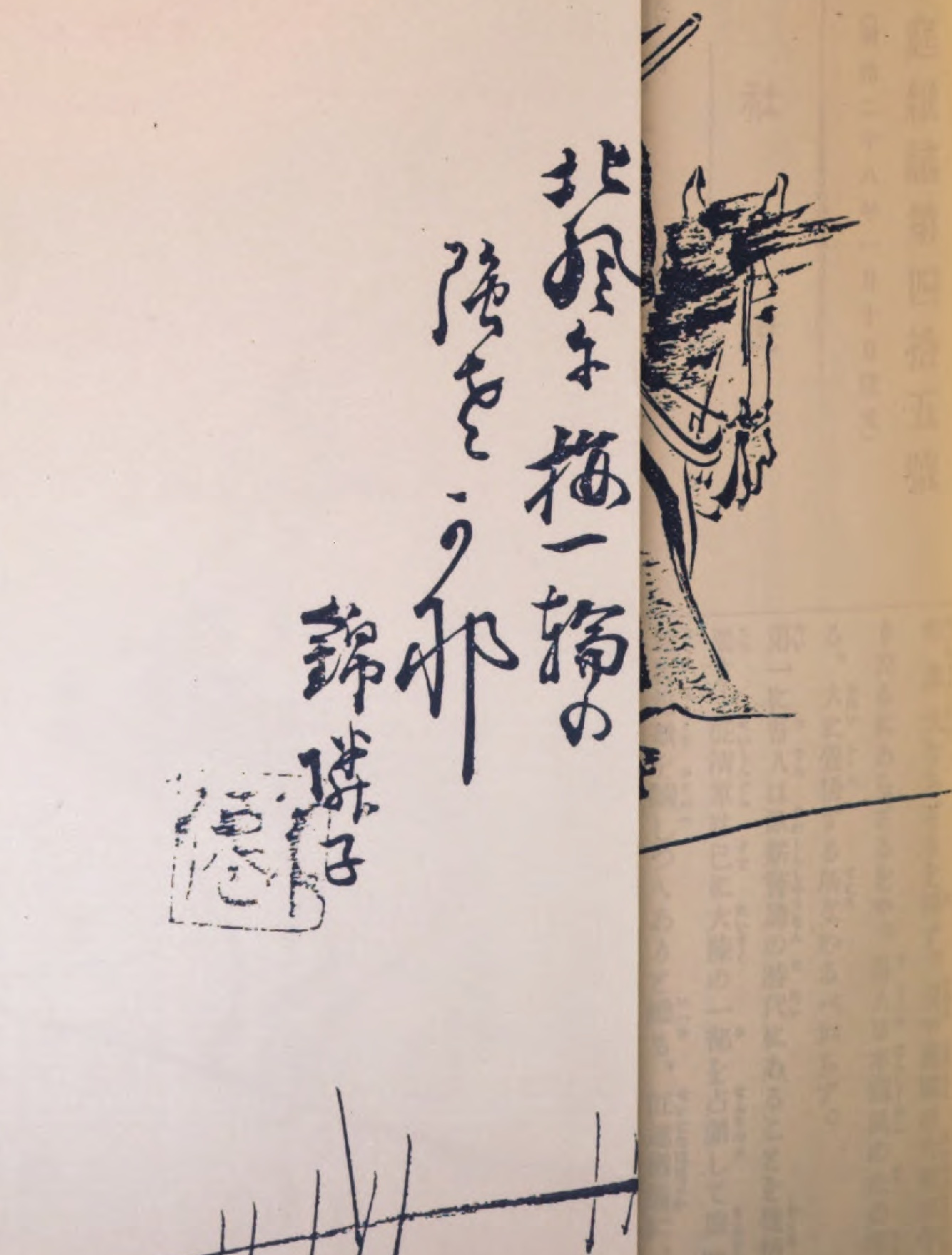
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 有馬俊彦
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十八年一月十日發行
家庭雜誌第四拾五號

目錄



家庭雜誌第四拾五號
（明治二十八年一月十日發兌）

社說

明治廿八年を迎ふ

春去り春來り春限りなし。歳々年々春なきはなけれども、此春ばかり多望なる春はあらざるべし。此春ばかり有爲なる春はあらざるべし。

單に美術の人民として知られ遊樂の國土として知られたる日本は、今や東方の一大强國として世界の視聽を聚め、將に世界の大勢を制するに至らんとす。吾人爭でか此の多望なる新年に際して此の勇悍なる國民の前途を祝せざるを得んや。

然れども光榮は常に責任を隨ふ。光榮愈大にして責任愈大ならざるを得ず。況や興國の大業亦今未だ成りたるにあらざるをや。吾人日本國民の此の年に於ける、大に覺悟する所なかるべからず。

第一に吾人は臥薪嘗膽の時代にあることを覺悟するを要す。征淸軍は已に大陸の一部を占領して旅順城海城に旭旗を飜しつゝありと雖も、征途猶遙に、結局の勝利未だ定まりたるにあらず。數萬の健兒は現に渤海の潮風に櫛り滿州の雪中に立ち、寒氣と戰ひつゝ又淸兵と戰ひつゝあるなり。畏くも一天萬乘の陛下さへ廣島の行營に征途の新年を迎へさせ給ふの今日、國民たるもの宜しく內に遊怠と戰ひ冗費と戰ひ百折不撓の精神を以て軍隊をして顧る所なしに猛進せしめざるべからず。軍氣をして老ざらしむるは國民の後援なり、家庭の意氣なり。

且つ夫れ日本の勢力は日淸戰爭以來已に世界の認むる所となりたるに係らず、未だ全く信ぜらるゝに至らざ

るものは、日本の忍耐が能く最後の勝利を收むべきや否やの疑ひあればなり。故に日本眞成の評價は更に光榮なる此の戰の收局をなすことによりて自ら之を定めざるべからず。

第二に吾人は大に世界的國民たるべき覺悟あるを要す。即ち更に開國進取の精神を發揮し、世界の智識を聚め、世界の傾向を察し、以て大に世界の大勢に參與するの規摸を定めざるべからず。

日清戰爭の勝利は國粹保存力に由て成されたる勝利にあらずして、新文明併呑力に由て成されたる勝利なり。智識を世界に求むるの國是は國家の地位が世界の强國と相接近するに從ひ愈不拔となるなり。

第三に吾人は外に膨脹すると共に內に充實するの覺悟あるを要す。又國家の膨脹に個人の膨脹を伴はしむるを要す。

國家の膨脹に個人の膨脹が伴はざるは伊太利の運命なりき。根なき草花の如く、輕氣球の膨脹の如く、愈膨脹すれば愈其內容を稀薄にし、愈茂れば愈其轉倒を速にす。

故に外に膨脹せんと欲するものは先づ內に充實する所なかるべからず。內に充實するは則ち個人の膨脹に外ならざるなり。軍隊の行く所商賈之に從ひ、個人の勝利をして國家の勝利に伴はしめたるは、曾て英人が世界の海王となりし所以なりき。

第四に吾人は常に文明の木鐸たるべき天職を擔ふことの覺悟あるを要す。道義は最終の戰勝者なり。勃興國民たるの品格あれ。汝の敵を愛するの度量あれ。國家として世界の標本となるべき意氣あると共に國民として人類の標本となるべき標致あれ。又常に文明の急先鋒として教導者扶助者の地位に立つべき希望あれ。

第五に吾人は宜しく勃興日本の業を維持し且つ擴張する爲めに興國民の新氣風を作て健全なる繼續者を育成

せざるべからず。勤勉に。俠武に。志氣遠大に。氣品高邁に。

此くの如きは吾人日本國民が此の空前の新年に逢着して、こゝに其覺悟を新にすべきもの丶一二なりとす。往昔スパルタの母は其柔かき手を以て慓悍なる國民を作りき。吾人は此等興國民としての覺悟が、先づ國家の基底たる我が家庭に於てなされんことを望むなり。

科學

雪と氷（承前）

《友人なりし雪一變して敵となれり》

我等は友人として雪を歡迎したりしが、それと同じ雪が、如何に背をむけて、我等を害するかを研究する時は、實に驚くに餘りある事實を見出すべし。

水火も厭わじと覺悟せる大切なる事業、必要目前に迫りたる大事、利益少なからざる商業も雪のためには路をふさがれて、之にさからふものは、如何なる孝子も、如何なる學者も、如何なる勇士も、善人も、用捨なく雪塵の下に生き埋めとなして、寸時の間に生命の根を絶たしむべし。こはたゞに人家稀なる山里のみならず、町里に近き村はづれにても、屢々人の雪漬を堀り出すとはめづらしき話しにあらず。

こは一個人にかゝわる災難なれども、山國にては聞くも恐ろしき出來事の、人家を襲ふを聞くと屢々あり。雪崩と稱するもの是なり。『雪塵』は霧の如き小さき雪の風に卷かるゝ時、起るが故に、風ある雪空に、外出せざれば、其害は受けずとも免かるを得べけれども、雪崩に至りては然らず。小供が雪轉かしを爲す時の如く、雪の一塊が、山頂より轉び始むるや、衣に衣を重ね、上衣に上衣を着けて、始めは拳位のもの、一丈も轉べば四斗樽大となり、十丈も下れば家の如き大なる

塊となる、然してこの塊の落つる勢につれて、傍らに幾個となき小塊のなだれを生じ、小塊は各々轉々して大塊となり、かくて山麓に達する頃は、勢は勢を助すけて、更らに大なる勢となり。時には一村舉つて雪塊の下に埋もるゝことあり。歴史によりて見るも、グリソンと云ふ所にて起りし雪崩は、雪の塊の落つべき山麓より、四町計り隔たりたる村を打ち碎きしと記しあり。

茲に雪轉げの一種なれども、亦た一風變りたるものあり。春の終り、もしくは夏の始めに至り、山や丘の頂にある雪の、少しく融け始むるや、山腹に積もれる雪は、其根本を融けたる水に洗われて、恰も急流を下れる船の如く、止め塲もなく滑來る中、容はだん／＼重なりて、大きく且つ重くなり、それとも知らず登れる旅人を、百雷の怒聲と共に、打ち碎くことあり。幸ひに山の傍に林ありて、雪の滑る路すじをはづるゝ時は、旅人はそこに生命を拾ふともあれども、然からざる時は大約その犧牲たるを免かれず。更らに經濟上に少なからざる影響を及ぼすものあり。氷荒らしと稱するもの是なり。內地にても時にその雛形を見ることなるが、木の上に積りたる半解の雪水、再たび寒氣に感じて氷結し、氷りたる上に更らに解けたる雪は重なり、重なりたるは又た氷りて、最上に位せる木の枝は之れがために折れて、その雪をば次の枝の上に振り拂ふ。次ぎなる枝は、已でにありたる雪の上に、更らに重き氷の穗りたれば、如何でか堪ゆるを得べき、同しく之を次ぎに送る。次ぎなるも亦た堪へずして折れ、又た下に送り下に送る。かくて大切に蓄へし大なる森は、雪解けたる後至り見るに、驚くべき損害を蒙むり、見る蔭もなき容となるとあり。

雪なき熱國は如何にして雪を知るや

寒國の人々が、印度にては太陽の熱にて釜の湯の沸騰

すると云ふが如き話を聞かば、小說にあらざれば、作り話しの如くに笑ふ如く、熱國の人々は、雨や水が塊まりて、鹽の如く硝子の如くなると云ふも、中々に想像に畫くを得ずして、仙人界の出來事の如く思ふなるべし。極寒の國と云ふ程にあらずとも年中氷と雪の世界に住みて水の流動するを見ると稀れなる國もあり。極熱と云ふ中には入らずとも冬も雪氷を見るとなき國は多くありてその國民等が固形躰の水を見もしくは流動躰の水を見んためには充分隔たりたる路を旅行せざるべからざるはめづらしき事にあらず、年中水の氷れるは炭火を燃して流動躰の水を得るとは容易なりといへども年中太陽の強き光線の下に水の氷る間なき國々の人等は如何にして世に雪なるものゝあるとを知るを得るやと云ふに高山こそ其の說明を實際に持ち來たりて親切に敎しゆるの眞敎師也。

平地にては雪は赤道以南にては四十八度の隔りにあらざれば氷結せず以北にては三十八度の遠さを以て始めて氷結すれども高山の頂上には雪は熱國寒國の差別なく同し美わしき形を顯わして人目を喜ばしむ。

かく雪の積りて四時絕へざる境を指して『雪線』と云へるがこの雪線は國により山の方向によりその高低を異にして一定せざれどもアルプス山の如きは僅かに九千呎の低きにあれどもアンデス山の如きは一萬六千呎の高きにありことに太陽に面せる山面をその反せる山面に比する時は非常の差あるを常とせるが一例はアルプス山に徵しても明かに見るを得べし卽ちその山南は山北に比するに雪線高きこと一千呎の上にあるを見ても知るべし。

不思議なる一現象

然るに茲に不思議なる一現象あり、彼の有名なるヒマラヤ山に登る人は、此山太陽に面せる南部の反て雪線低くして、北方の寒かるべき方、反て雪線高き一事を

見る。之に付きては、已に種々なる研究は爲されしが、未だ判然たる斷定は下し得ざれども、推するに此山の南方は、太陽には面せるも、印度より來たれる濕氣多き颶風のため、年の半は吹き付けられ、濕氣の去る時なきに引きかへ、北中部亞西亞の送りものなる、極めて乾燥せる風のために雪を溶解せられ、蒸發せらるゝが故に、かくは多量の雪を見るなり。(乾燥せる空氣と雪の關係は次にあり)かゝるためしは、外にも多くあり。中部亞西亞にある、ヒマラヤ山の西北の派なる、カラコラン山は、その起本なるヒマラヤ山より遙かに上ぼれり南部アメリカのアンデス山に於ても、この例は著しるしく顯はるゝを見るなり。

極寒地の雪は解くる時ありや

若し雪が、太陽の熱度の多少にのみよりて溶解の度を定むるものなりせば、兩極に近き寒國民は、如何に不幸なる生涯を持つべきぞ、然るに雪の溶解は、たゞに熱度のみにあらずして、空氣乾燥の度にも係わると多きは、造化の智力の完全にして寒國民のために計れる處多きを感ずるに餘りあり。されはラブランド、シベリヤ、ロシヤ等の如き極寒の地は、空氣非常に乾なるが故に、他の地方の溫度にてはとても消ゆべき時ならざるに、其地方の雪は、早く已に溶解の樂あるを得るなり。北極探驗者の一人なる、ヘイと云ふ有名なる學者は、その紀行中に云ひける樣、北氷洋に面せる極寒地にて、一の不思議なる現象を見たりき。そは一日シヤツを洗濯して、外に干したりしに、通常の考へよりして、このシヤツは堅く氷てとても數日にてはかわくまじと思ひしに、不思議や一二日の中に全くからく〳〵と乾きたり。全じ所にて、又た奇態に感ぜしは、幾十尺ともなき氷の大塊が、かゝる寒風烈げしき中にありて、漸々と氷解し、遂に後もなきに至りしとなり。こは極寒地方の空氣の乾燥せるによるもの也と、學理に

照らして知られたり。

高山上の雪は變更する時ありや

富士山上の雪を見る人の心に浮ぶは、其雪の變る時ありや否やにあり。然り山上の雪は、その重力のために漸々下だり來たりて、雪線以下に達するや、忽ち溶解して、上には更らに新らしきもの積れるなり、且つは寒き處は總して空氣乾燥せるが故に、極寒地方と同じく、乾燥殊更らに早やきなり。

氷の花の試驗

清水の氷は、硝子の如く透明なるとは、誰れしも知る處なれども、氷に一定の組織ありと云ふ事は、信ぜざる人々多かるべし。そは鏡の如き氷を、如何に透して見るも、又た破して見るも、一定の破れ方もなく、一定の縞も見へざれば也。されどその結晶は、雪と同じく、各々一定の規則を出でざる、所謂氷の花を有するとは、試驗によりて知られけり。

有名なる理學者チンダル氏は、此の說をたしかめんためめに、簡易にして有益なる試驗を行なへり。即ち氷の一片を取り、太陽の光線が、直角即ち垂平にその面上に落つる樣に傾むけ、氷の後に白き布片を置く時は、太陽の熱は氷を通して一所に穴を穿がつ事を爲さずして、彼處此處を少しづゝ溶解して、所々に隙き間を作るべし。さて其時、後の布片に影りたる影を見る時は、美くしき氷の花は、各々穴を中心として、正しき六角、若しくは八角の劍を有つと、雪の花と殆ど相同じ。その中央の穴のある所こそ、氷が空氣を保もつための穴にして、その能く水上に浮ぶも亦たその功なり。

氷の家は温かき證據

雪や氷にて作れる家に住まひ、温かなるを喜べる北國人の話を聞く人は、よもその話しの誠なるを信じ給わざるべし。されども實際氷の家は温かき事は、近き試驗によりて知るを得べし。北極を探驗せる學者、スコ

ルビー氏は、一日入用の事ありて、火を得んと欲し、ふと思ひ付きて、氷の凸鏡を作り、太陽の熱を導びきしに、硝子と等しく光線集まりて遂に發火せりと云ふ。之を以ても知るべし、太陽の熱は、冷たき者を迹るによりて、少しも加減なき事を。（終）

文藝



妹横井つせ子の永眠を悼みて

徳富久子

昨日まで風に散り行く紅葉を
　見ても君のみ思ひしものを』
袖たもと牽つ牽かれし中絶へて
　早やおくつきの隔てはてしか』
風わらき浮世の波路渡りすきて
　天の湊に吾や待つらむ』

叔母君横井つせ子

徳富健二郎

明治二十七年十二月十九日、吾叔母君横井つせ子、攝州神戸に永眠す。後數日、親戚故舊其遺骨を擁し、京師洛東南禪寺内松柏陰寒く霜柱終冬融けざる所に葬り了んぬ。

呵余不肖、姪と稱するを愧づと雖ども、情は即ち母子に類する者ありき。數載の前、余が双親の膝下を去り、家兄の几下を離れ、東去西來幾春秋、恰も風打の萍の如く繫がざるの舟の如くなるや、東に一人の叔母君あり、西に一人の伯母君あり、日夜に思を馳せ心を碎き

玉ひし吾母上に代り、吾爲めに碇となり湊となりて余を沈淪より救ひ玉へり。故に余常に謂へらく、吾に三人の母上ありと。然して今や萬一の報復未だ爲すに及ばざるに、其一人は遽焉吾を棄てゝ他界の人となり玉ひぬ。幽明相距る天よりも遠く、懐しき其面影、忘られぬ言葉、恩情、筆の跡、皆昔語りとなり果てゝ、余が爲し得可き事は、唯拙なき筆に其生涯の萬一を傳ふるのみとなりぬ。哀 夫。



＊　＊　＊　＊

吾叔母君横井つせ子は、故小楠横井平四郎先生の夫人にして、横井時雄氏及海老名みや子の實母なり。天保三年七月生る。父矢島忠左衛門直明氏は、肥後國上益城郡杉堂村の郷士、久しく總庄屋の職にあり、清廉にして民を愛し、公に奉じて私を忘るゝの士なりき。母諱はつる子、淑良にしてよく大勢の家を治め、文才ありて手藝に堪能なりき。矢島の家に一男七女あり。叔母君つせ子は其第五女な

り。幼少より、温順にして言葉少なく、二親に孝に、同胞に友なり。幼時身躰虛弱、病に罹るの日多ふして、健やかなること稀なりければ、兩親いたく其行末を案じ、つせ子の事常に苦勞の種子となりぬ。つせ子深く吾病躰の爲めに二親の心を傷むるを悲しみ、是より病あり、心地悪しき折に、窃かに鏡に向つて殊に化粧を濃やかにし、紅粉に病容を隱くして父母の前に出ぬ。是れつせ子十三四歳の頃の事なりと、吾母上は語り玉ひき。

兩親より賜はりしもの、自から製したるもの、衣服にせよ、品物にせよ、其の好きは皆姉妹兄弟に分ち與へて、自らは補綴の當りし着物、破れかゝりし品物に滿足したるも、またつせ子の猶乙女なる頃なりき。

つせ子二十歳の頃、母つる子中風に罹りぬ。つせ子介抱到らざる所なかりき。程なく母沒して、父忠左衛門氏また中風に惱みぬ。時に四人の姉は皆それ〲嫁して、二人の妹は猶頑是なく、一人の兄は多く出でゝ外にあり。病親の介抱、家政の料理、二妹の養育、皆つせ子一人の肩にかゝれり。つせ子樂むで其勞に服し、父親を安らかに其おくつきに送り、難なく二妹を育て上げぬ。是れより兄妹四人村里に引退きて、つせ子は妹と糸を紡ぎ機を織り、生計の艱苦を味ふこと三年に及ぶ。

居ること三年、つせ子は良緣を得て、兄の師なる藩士小楠横井平四郎先生に嫁することゝなりぬ。時につせ子廿三歳、小楠五十歳に近く、殆んど父と女の如くなりき。當時肥後の横井と云へば、天下の志士知らざる者もなかりしと雖ども、家計の貧困尤も劇しく、且姑氏は多く老病の床にあり、嫂きよ子良人を喪ひ二子一女を將て同居したれば、夫に事へ、姑に事へ、嫂に事へ、二甥一姪を撫育し、門弟を督し、往來の賓客を待し、家事一切を取計らふは、多く二十歳を越えぬ新婦には

大抵の苦心にあらざりき。然もつせ子は毫も之を苦とせず、叱られては自から顧み、誤つては即ち改め、心を盡して夫に事へ、長上に事へ、子供を愛撫せり。つせ子謂へらく、亙人は天下の士、實學儒學の泰斗と仰がるゝに、妻たる吾身無學にては叶はじ、女なれども年邁みたれ共、出來得る丈學問して、夫の名を辱かしめざる妻とならばや」と。是れより夫の門弟を集め經を講じ道を說く毎に、つせ子は家事の際を偸み窃かに襖の陰に來り書を披ひて亙人の講話を聽きぬ。つせ子人の爲めにして私なく、心を虛うして言を納れ、靜かに默して實行を務む。小楠先生常に嘆じて曰く、「おつせは君子だ」と。

已にして徳川の天下次第に動き初め、志士の來往ます〳〵繁く、小楠先生も越前松平春嶽侯の聘によりしば〳〵越前より江戸の間に往來し、國に在りては開國を忌み攘夷を唱ふるの徒先生の身に害を加へんとする者あり。つせ子彼に此に心を用ふる殊に苦しみ、客間の話聲高になる時は、懷劍に手をかけて襖の陰に樣子を窺ふこともありけり。時雄氏、みや子、此間に生れ、養育の心づかひも亦一入なりき。

斯りし間に明治元年王政維新の歳となり、天下の俊才は盡く京師に召し上ぼされぬ。小楠先生素より徵中にあり、上京間もなく從四位下に叙し、參與に拜し、至尊に咫尺して天下の大計を定むるの榮を荷ひ、横井一家は鄕閭の羨望嫉妬の中心となりぬ。つせ子いよ〳〵自から抑損し、沼山津村に閑居して、蠶を飼ひ糸を紡ぎ、勤儉力行、以て家を治め、子女の敎育を施こせり。奴婢みや子に美服を着けしめむことを勸むる者あるも、つせ子は堅く之を斥けて、手織木綿にあらざれば、着せしめず。人は若樣々々と囃し立つるも、つせ子は嚴に時雄氏を促して、其勉學を督勵せり。家に奴婢少なきにあらず、然も洒掃厨事つせ子之を自から

し、みや子の如きも小供心に思はず知らず斯くするを婦人の職分と心得、喜んで手傳をなすに到れり。沼山津村は熊本城を東南に距る二里、連山遙に前を繞り、田野濶く後に開く。安政三年以來小楠先生の棲遲する所、時雄氏みや子皆此處に長ず。明治十八年の初春、余時雄氏に伴ふて上益城郡杉堂村に我等の伯父にしてつせ子の兄君たる矢島直方翁の病を問ひ、歸途沼山津村を經。時雄氏田圃の間石垣築き繞らして一株の松を植えたる堆丘を指して曰く、彼處は先大人の遺髪を埋めし所」と。又竹藪越しにチラ〳〵隱見する一家屋を敎へて曰く、彼なりしと覺ふ、余が育ちし家は」と。行ひて沼山津川畔に出づ。水に藻多く、岸に柳多し。春風吹ひて萬條の緑水面に搖曳す。時雄氏佇立良久ふして愴然余を顧みて曰く、彼柳樹の水に臨む所は、先大人の好んで釣り玉へる所、余も亦しば〳〵魚籃を提げて先大人の側に立ちぬ、而して先大人の變報到れる日、余は從弟不破君と此川に釣りし、歸つて見るに一家皆涙容あり、故を問ふも答へず、而して余はまた甚だ掛念せず、不破君と互に釣る所の魚の多少を爭ふに餘念なかりし」と。小楠先生刺客の手に斃るゝの報沼山津の閑居に達せし時は、つせ子は曩きに接手せる良人の書によりて、まさに時雄氏みや子を將て上京せむと、暇乞の爲めに近在に打廻れる所なりき。

慟哭、而して沈痛、而して奮勵、つせ子は髮を截ち、涙を揮ひ、居を熊本に移し、熱心時雄氏及みや子の敎育を務めぬ。小楠先生賊難に遭ふの日、短刀を揮て敵刄を架隔せるもの、刄こぼれて鋸の如し。遺物到るの日、つせ子其短刀を執て時雄氏に授け、以て其志を勵ます。

已にしてつせ子曩きに愛育する所の二甥横井左平太、大平の兩氏米國游學より歸り來り、其盡力によりて熊本に洋學校初めて起る。つせ子先づ時雄氏をして就て

學ばしむ。已にしてまたみや子を入學せしめむとす。内外異論囂し。つせ子肯みず、吾母上と計つて、みや子及吾姉君はつ子を就學せしむ。是れ熊本に於て婦人の特に學を修むる嚆矢なり。間もなく洋學校生徒間に基督敎信仰の事あり。迫害大に起る。時雄氏また重なる信徒の一人、小楠先生の嫡男として四方注目の集る所、攻擊尤も劇し。つせ子此際の苦心、言ふ可からざるものありき。つせ子謂へらく、吾敎育足らず、一子を左道異端に陷らしめば、何の面目ありて地下の夫を見、世間の囑望に答ふ可き、已むなくんば自害して果てむ」と。竊かに一通の書置を認め、懷劍を帶の間に藏くし、時雄氏を膝下に呼むで信敎の理由を詰問す。時雄氏具さに奉敎の由來を說く。つせ子心大に動き、是れよりまた太甚迫らざりき。吾母上深く叔母君の苦心を掛み、しば〳〵行ひて之を慰め玉へり。母上の行き玉ふ毎に、余も伴はれて行く。余時に年漸く七八歲、母上と叔母君と相對して泣きつゝ話し玉ふを見るも、其何事たるを解せず。橫井家は當時熊本古城蓮堀の端にあり、堀を隔てゝ洋學校を眉端に望む。邸中に小池あり、水濁りて龜子多く棲めり。余竹條を取つて之を追ひ廻はし、樂むで時の移つるを忘る。されば余はしば〳〵母上を促して「龜子の叔母さんところ」に行き、果ては龜子を強請し、否と云はれて大立腹したることもありき。

是後時雄氏みや子は東京に西京に遊學し、叔母君は靜かに年を重ね玉ひしが、明治十四年時雄氏の跡を趁ふて一家伊豫今治に移轉の事となり、同年時雄氏より授洗して熱心なる信徒となり玉ひぬ。其後一たび熊本に來たりて兄君矢島直方翁の重病を介抱し玉へる折の外は、久しく相見るの機なかりしに、明治十八年の春余は時雄氏に從て今治に赴くことゝなり、玆に親しく叔母君を識るの機會を得たり。余は如何に叔母君に負

ふ所の多きかを言はざる可し。唯余は云ふ、余は到る所に献身の生涯を送る叔母君を見たり。自から青年の間に立まぢり、一個の生徒となりて聖書を研究する叔母君を見たり。如何なる貧困汚穢の家をも、見舞はざるなき叔母君を見たり。教會の男女老幼皆叔母君を仰ぐ母の如く、不平者は來りて慰められ、心痛者は來りて助けられ、多くの爭は此におさまり、多くの不快事は此に來りて融散するを見たり。而して余は南海基督敎の雄鎭として燧洋の濱、砂白く松靑き所に突として高く聳へたる大會堂を見る毎に、其基礎石たる時雄氏の働を思ふと共に、また時雄氏の後に外にあらはれざる一大勢力の存するを思はざる能はざりき。

明治十九年の夏横井一家更に西京に轉じ、幾もなくつせ子は東京に女みや子の產褥を護り、二十年の一月西京に歸る間もなく、時雄氏夫人峯子產後病重く、つせ子は殆んど歸裝を解かず看護數晝夜に亘れり。峯子永眠の朝、余行ひて叔母君を訪へば、顏色黃蒼また生人の色にあらず。明日峯子を南禪寺に葬る。南禪寺は小楠先生の墳墓の在る所、峯子の墓は舅氏の墓に並べり。寺に着する頃ほひ、日落ちて暮色東山に滿ちぬ。余は横井家老夫人の手を扶けひきて今まさに掘られつゝある墳墓の傍に立てり。忽ち後邊に人波うち騷ぎて、横井家母夫人怪我ありと叫ぶ。余は老人を他に托し、雲の如き人數の中押し分け掻き分けて、山門の方に走せ出づれば、叔母君已に扶け載せられて車上に仰臥し、車を繞り立つ者四五人、横井家の老婢は狂氣の如く吾羽織をぬいで叔母君の足に打被せ居れり。提燈の薄き光に透かし見れば、叔母君は顏色土の如く、眼口共に左方に拘攣して、殆んど呼吸の音も聞へず。手を執りて「叔母さん」と叫べば、かすかに眼見ひらき「ハイ」と答へ玉ふ聲蚊よりも細し。時に日全く暮れ、南禪寺畔松黑うして面を吹く夜風氷よりも冷やかな

り。遙かなる墓地の方には埋葬の式恰も終れりと覺へて讃美歌の聲闇を通して一斷一續、幽然他界より來るに似たり。此方には無言の一群一燈ともして半死の叔母君の車を繞る。此際の感、七年の後之を想ふも、猶心の痛を覺ふ。吁吾叔母君の不治の病を得玉ひしは實に此時より起れり。誰か思はむ、七年の前此處に病を發し玉ひし叔母君は、七年の後一片の焦骨となりてまた此處に來り玉はむとは。夫妻舅嫁墓相隣る。ア、若し石にして知るあらば、枯骨にして知るあらば。

叔母君の病は中風なりき。四五ヶ月にして漸く甘快に赴き玉ひしかども、身神また舊時の比にあらざりき。然も叔母君は病によりて確かに道に進み玉へり。此年暮春の山に杜鵑花さく頃なりき、一日叔母君は肩摩りつゝありし余を顧みて云ひ玉はく「わたしが斯うした病氣も、神の聖旨であるかと思へば、却つて嬉しう思ふ、時雄サンの御父サンが始終わたしに其う仰しやつた、お前の樣に小さな智慧で俐巧で世を渡らうとしても決して行かぬ、オレはドウ考へて見ても天道樣は在るぞ、決して其うこせ〳〵した事では行かぬ、と斯う仰しやつたが、わたしが平生あまりこせ〳〵して居たから、神樣が斯う身體を不自由にさして、ゆつくり心を修行する樣にして下さつたのかと思ふと、却つて嬉しう思ひます」と。叔母君は確かに安心立命の地を得玉ひしなり。

明治廿年の夏横井家更に東京に移り、次で時雄氏洋行の事あり。叔母君は留守をまもり、孫子孫女を教育し、婦人矯風會に盡力し、婦人老人會を組織し、隙々には挿花を學び、和歌を咏じて樂とせられぬ。叔母君一生事多くして文事を修むるの暇あらざりしかば、和歌の殘れるもの殆ど少なし。唯

　木の間の風ぞ涼しかりける

の二句、上三句を逸せるもの、母上の記憶に存せり。」

明治廿三年時雄氏海外より歸りて、宏壯なる本郷東竹町の會堂成れり。明治廿四年矢島家の二女三村りも子上京して、德富久子矢島梶子共に四姉妹東京に打集ひぬ。明治廿五年の夏、叔母君吾母上と相州逗子に遊び、往來三旬餘。兩家相距る五六町。母上日々孫女を挈へて磯邊に出で丶待ち玉へば、叔母君また孫女を挈へて青松亂生の砂丘を越えて來り、於是老姉老妹携へ來れる毛布を砂上に敷き、或は語り、或は祈り、或は歌ひ、而して孫女は孫女と貝を拾ひ砂を掘りて戯れ遊びぬ。如此きもの三旬餘。流光速なる哉、時雄氏の配峯子沒するの日、家婢の背に負はれつ丶「今いくつねんねしたらおかあちやんに逢はれるか」と問ひし孫女は、已に兒女髫結ふ年となり、忘れ形見の一子も、早や犬を打ち石を走らす童となりぬ。

明治二十六年時雄氏更に洋行を企て、然もつせ子の老衰を顧ひ、躊躇決せず。つせ子老病の身再會の期或は無からむことを知らざるにあらざるも、快よく其請を許し、上帝の爲め邦家の爲め努力勉學せむことを勸めらる。時雄氏洋行の事於是決し、同年七月叔母君は其二人の孫と行ひて神戸なる女海老名みや子に寄ることゝなりぬ。余之を横濱に送り、送りて船上に到り辭して歸りぬ。人影閃過荷物紛々の間に「左樣なら、ドウも遠方ありがたふ」と言ひつ丶チラリと見せ玉ひし半面の影こそ、余が此世に於て叔母君を拜するの終なりき。

明治廿七年四月矢島家の第三女にして亡き叔母君と共に吾第二の母たる伯母君竹崎順子東上の途、神戸に立寄り、淹留旬餘に及びぬ。同五月其姉君なる三村りも子熊本に永眠せらる。七月の末、神戸なる叔母君は珍らしくも余に手紙を賜へり。

先日は御寫眞御おくり被下誠にありがたく始終取出しながめて悦び申候當夏は嚴しき御おつさにて御

地は如何に候哉當地などは誠に雨なしにて日々あつさに困り入り申候御もとにては先日來御母様少し御不快にて逗子御出も御のばし遊し候よし其後如何にわらせられ候哉此あつさにては東京の住居もずい分御こまり遊さるべく何とぞはやく御すくれ遊ばし逗子へでも御越し遊ばし候様あれかしと祈り居り申候竹崎様にも御機嫌よく御歸り着遊ばし先々御めでたく三村おば様は夢の様なる事にてざんねんの至りに御坐候とかく人は逢ふた時がわかれにて御坐候何も右迄申上度い才は跡より申上べくあら〳〵めで度かしく

八月一日　　　　つ　せ

健二郎様

かへす〳〵〳〵〳〵へ別紙上げ不申くれ〳〵よろしく願上候時下御自愛専一に祈上候又々めで度かしく

是れ余にとりて叔母君の絶筆なりき。一通の遺筆、今日披き見て腸斷たんと欲す。「兎角人は逢ふた時かわかれにて御坐候」、一句恰も讖を爲せるが如し。悲ひ哉。」

神戸に移り玉ひてより叔母君は愛女みや子の介抱を受けて、優游更に憂を知らざるもの丶如く暮し玉へり。去秋家兄廣島往復の道、神戸に立寄りて叔母君を訪ひ玉ふこと兩回。歸つて云ひ玉はく、叔母君甚だ異狀なきも、精神いよ〳〵衰へ玉へりと。十二月初旬に到り、神戸なる海老名みや姉より飛書到り、叔母君病氣再發の旨を報じ來りぬ。已にして危急の電報あり。十二月十九日夜深の電報は終に

八時スギヤスクデムル

と報じ來りぬ。吁叔母君は愛女の腕に倚りて安かに眠り玉へり。享年六十又四。

訃達するや、病床に在ませし母上は泫然として云ひ玉はく、わたしはあきらめもす可けれども、時雄さんが嘸ならむ」と。

是れより先き矢島一家兄姉妹八人の中、長女藤島もと子は十數年の苔蒸したる谷中の墓に横はり、兄矢島直方翁は熊本に沒し、昨年の五月二女三村りも子は熊本に逝き、横井つせ子今また神戸に眠る。今は東都に一姉一妹、西海に一姉一妹を剩すのみとなりぬ。

横井家に老婢あり、名は壽賀子。家に在る已に四十年、昨年來失明して神戸にあり。舊臘二十一日叔母君の葬式神戸會堂に擧行せらるゝの日、壽賀子探り寄りて棺に取つき、聲をあげて泣き口説きしと聞く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吁吾叔母君横井つせ子は、外に赫々の名なく、昭々の功なきが如しと雖も、内に無價の寶玉を藏し玉へり。其の己を忘れて人の爲めにし、天を信じて命に安んじ玉へる献身の生涯は、實に掬むで盡きざる教訓の泉なり。今母上に就て其記憶したまへる所を質し、自から記憶する所を倂せ玆に其一斑を記す。

＊　＊　＊　＊

明治二十八年一月五日、叔母君神戸に逝き玉ひしより十七日、遙かに京師洛東南禪寺の新墳を拜して

小姪　德冨健次郎謹記

家庭の移殖

筑峯女史

打つゞく我か皇ら軍の戰勝に幾多の土地を占領しつる高きいさほをきくにつけ、いとゞ思ひの積む雪につれて、寒さはげしき寒帶地の草木もつらゝはりつめ、無情の北風凜々と益荒猛け雄の肌に徹し、手足もきるゝばかりこの慘たんなる嚴冬を、御國のためとて一すぢに進み行く遠征諸士の艱難辛苦いかばかりか、想ふにつけても暖かき家に居て日每を無事に送るこそいと有難き心地すれ、去りながら女の身にては軍務に公務に

弁走盡力すること出來難ければ、たゞ家政てふいと重大なる責任を盡すより外に術なし、ゆゑに主婦となりてよく其の夫を助け、家内の整理に身を入れ、一家を安全繁榮に立て行かば幾分か、心休まり侍るべし、なほその上の事を望まば、男子と共に占領地へ渡航なし、家庭を彼の地に移し植へ、我か日の本の領分とならずとも、責めては諸國人の住家を多く作るこそ何よりの手柄なれ。さなくは折角武士の血もて取りたる領分も再たび敵のものとなり、骨折し甲斐もなからまし、聞き居れは異つ國の殖民地とやらには男子のみならず女子も諸共移り住み、本國の領分を擴め、我身の榮えをつとむとかや、此くなくては御國の領分も廣くなる時はあらしとこそ思はるゝなれ。今までは國内にのみ閉ち籠り、片時も盡すことなかりしか、今より後は御國の外に移り行きて家庭を作る工風せではならぬ世の中となりぬべし、况してや軍隊の骨折の跡を末永く遺さんには、男女諸共移り住み、家居を構へ、新なる日の本を作るより外なきそがし、然るに女子とし云へは世の人も役に立たぬものと思ひ、女子自からも侮り賤しみ、大切なる責任も盡さて草木の樣に一生を送ることあるはうたてし、日の本の威勢も外つ國に及ひ侍りたる今日となりては、一層心を勵まし骨折を惜ます家を富まし御國を益する心懸大切なめり、とりわけ家庭の移殖はいと大切なる事と思ひ侍るになん、

薪こり

松琴生

吹く風寒き夕まぐれ
霜消えやらぬ森かげに
年まだわかき乙女子が
薪こるなり二人して

亂れし髪は色もなく
うすき衣さへつゞれしぬ
破れし山かごたづさへて
あさる姿ぞあなあはれ

茂る木の間を行きかへり
別れつあひつ歌ひつゝ
語ろふさまもむつましく
落ちし枯枝を拾ひつゝ

ねぐらもとむるおがらすの
聲さびしくも聞こゆなり
身をきるごとき山風は
はぎにかひなに吹きすさむ

日の暮れぬ間になほしばし
はげまんものと告げあひて
姉は岡べにのぼりゆき
妹は谷間にくだり行く

やがて滿ちけむ山かごを
重げに負ひつ打ちつれて
母や待つらんいそがんと
家路をさしてかへりけり

あたりを暗き山かげの
歸りを急ぐ木かげ路
あるゝふゞきに乙女子の
かげはいつしか見えうせぬ

若水

近衛師團　錦谷生

一

幾歲と問へば幼兒は　蕨の片手やさしげに
「ひとふた三ッ四」昨日迄　閉ぢて敎へし一ッをば
今日は「五ッ」と開くなり
父樣いづく「父さまは　御馬にめして先の日に
支那征伐に行きましつ　幾つか寢ても來給はず
お正月にも來たまはず
「戰に勝ちてかへりきつ　よう留守したる御褒美を
たまふべかりし其時は　今日の事にてなかりしか
お正月ではなかりしか」
過ぎ行く月日の駒早み　去年の水無月我夫の
門出でませし其日より　燕はかへり雁は來ぬ
今日は今年と早やなりぬ
あれ〳〵聞けば戸の外に　一夜明くれば賑はしき
うなゐ乙女が謠の聲　千秋萬歲々々と
合はす調べも鼓にて
膺てや懲らせと勇みぬる　御國の人のこゝろには
如何に樂しく聞ゆらむ　かゞやき渡る朝日影
年立ちかへる空の色

二

思へば戀ひし我夫の　明日出でたゝす其ゆふべ
語り置くべきこともなし　「只身を厭ひいそしみて
敎へそだてよ幼兒を」
聞て我身が答へしは　「かりそめならぬ契にて
皇御國のものゝふに　かしづくからはか許りの
心づくしは何ならむ
「やがて敵うち平げて　彼の唐土に聳ゆてふ
崑崙山の峰よりも　高きほまれを輝かし
錦かざりて歸りませ

「戰の塲にむかしより　いくその人の名も捨てゝ
心後れしためしには　いとしや家に殘したる
妻子のありと聞くぞかし
「必らずあとに御心を　殘したまはで一すぢに
君と國とに盡してよ　我身の願ひ是ばかり
あわれ御心安かれよ」
打微笑みし我夫は　健氣なりとやめでにけん
手をとり給ひ「それでこそ　それでこそ我妻なれ」と
力をこめしその言葉

三

送る門邊にかへり見て　「さらば」と扛げし駒の鞭
つきぬ名殘を打ち斷ちつ　留めかねにし我思ひ
包むに袖の露もれき
夫にひめにし我なみだ　男心にはげまされ
動かじものと引きしめし　手綱も今はゆるみてや
昨日にかはる憂き月日
身はうつせみの心なく　泣てあかせし夏の夜は
短かき夢をはかなみて　たへなんばかり何事も
手にとる力あらざりき
吹き立つ風の身にしみて　何時しか秋の暮近く
なげきは遠き夜半の鐘　物思へとや鳴く虫に
つきぬ哀を數へつゝ
霜夜を渡る雁の聲　便り待つとにあらなくに
なかむる空の月ふけて　また伏し沈む我身ほど
あやしき者はなかりけり
時雨木からし雪みぞれ　胸に氷の解くひまも
あなたの空をながめては　朝な夕なに去年ばかり
思ひに暮れて年もなし

四

あるは牙山に平壤に　數度の戰ひありと聞く
其戰ひのあらましを　告げこす新聞を見る毎に
胸とゞろかぬ時もなし

攻むれば破り戰かへば　勝たぬ事なき御軍を
御國の人の打ち擧り　祝ふかなかに我身のみ
泣きて明せし夜はもあり
只無事なりと我夫の　時に告げこし文にだに
なほ行先の思はれて　かざす劍のつかの間も
安きことなき去年の冬
如何に我身はたをやめの　心弱しといはゞいへ
夫に誓ひし言の葉を　思ひ出づれば耻づかしき
我身ながらも過てり

五

月日新たに今日よりは　ふるひ起さん我こゝろ
軒のくれたけ庭の松　雪に咲き出る園の梅
たゆまぬ色を友としつ
春の心を千代かけて　今日汲み初むる若水に
夢と見し世の味氣なく　たへぬ思ひに留めつる
涙のあとを洗はなん

まだがんぜなき幼兒に　憂を敎への樣見せて
「母樣坊もかなしや」と　又云はせまじ今日よりは
母がつとめをいそしみて
たとへ戰のいくそ歳　續くとあるもなか〳〵に
君の御爲め國のため　身をも心もつくすなる
ますらたけをに契る身は
夫が譽を身に分けて　我も盡さん國のため
父に劣らぬものゝふを　敎へ育てゝ我夫の
歸り來まさん日を待ん
あはぬ其間の形見とて　夫によふ似た面ざしの
凛々しく見ゆる其眼元　ちつとむすびし唇は
雪に蕾めるべにの梅
骨たくましく肉肥えて　みどり色濃き黑髮は
ゆらくばかりに生立ちつ　末たのもしき武者振の
苗より見ゆる花の色
雲海萬里道遠き　八重の潮路を隔つとも

かなたの國も神やます　うら安からず思ひしは
かよわき人の心なり

家政

一家の經濟

一家の經濟を整ゆるは、家屋を積み上ぐるが如とし。強堅なる基礎をすへてより、漸々に積み上ぐれば、小さき家には小さき相應の結果あらわれ、大なる家には又た之れに應じたる出來ばへあるべし。今年の柱を立つるに最も好き今日の正月に當たりて、此の事に心付ける妻君は、已でに今年を幸福に送れると同じく、然らざる人々は、又たも昨年と同じ後悔の暗みをたどるべき前途の運命を有するなり。

されば、年々幾たびか決心して半ばより亂だれ、遂に整はざる失望に打ちすてたりし會計の帳簿も、今年は始じめより明かに收入支出を記載して怠ることなく。今年も堅たき決心の中に、正月のみは過ごせしも、三月四月の温暖なる時候と共もに、心の氷の溶解して、遂に思わざる衣食の奢りに、自ら後悔の苦しみを腦に沸かせしを顧みて、同じ後悔の後を踏むことなく、一時のはやり氣、一時の飲食衣服のために、折角起こしかけたる家の規律を破ぶることなく、今年を幸福に過ごし得ると否とは、主任なる妻君の決心の度によるなれば、妻君は責任小ならざると共とも、勉とむるとも大ならざるべからざる也、

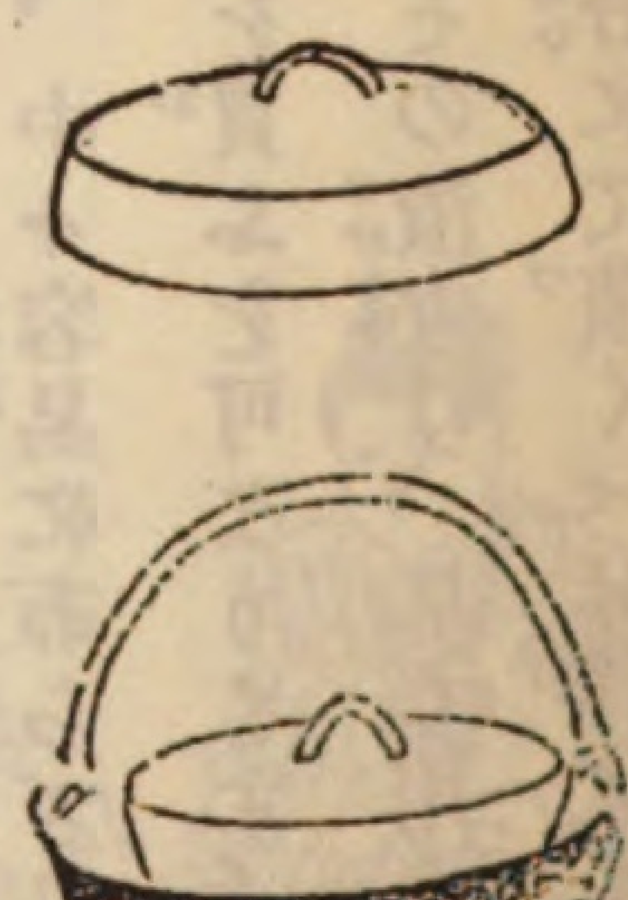
殊とに、温かき衣を重さねて尙ほ寒むさに堪へず、熱火の爐を抱きて尙ほ冷を覺ぼゆる今日にありて、夫は一點の火もなく、一杯の汁も稀れに、晝は嶮山に攀ぢて敵の銃砲の間を辛ふじて避がれ、或は足の棒と化る迄走りて休すむ所なく、手の切る丶が如き冷なる銃を握ぎりて敵と鬪ひ、然かも夜に入れば眠むるべき一枚の

夜具もなく、雪と風を覆ふべき一個の屋根もなく、正義のためならでは殆ど堪へかたき苦難のかぎりを嘗めつくせる、その留守を守もり給まへる妻君等は、政府よりの命令によりて、物見遊山を止めらるゝに、初じめて悟とるが如きとをなさず、止むを得ずして美衣美食を廢するにあらずして、せめては、夫が苦感の千分一をも、己が腕に荷なふの心持ちにて、小き一事一點にも、潜心注意して費へを省ぶき、夫に一家經濟の心配迄を負わしむべからず。

有名なる經濟學者は經濟の秘决を說きて『入るを計るよりはむしろ出づるをはぶけ』と云へり、如何に多くの收入ありたりとても、籠に水灑ぐが如とく、出づる事極まりなきときは、何時迄立つ共溜まる時なし。之に引き更へ、たとへ一滴の水にても、集むれば大桶にも滿つるを得べし。故に事は小事に注意深かきより成功の近か道はなし。左にかゝぐる事は小事なりとて見のがし給ふべからず。

經濟的の鍋蓋

理學上より論ずれば、六つかしき道理もあるべけれ共、實驗上よりするも見易すきは、日常用ゆる鍋蓋の不經濟にして、不清潔なることとなり。同じ一枚の綿入を着するも、下着としてさほど暖たかならざるもの、上たりたんぜんのとく着して暖かきを感ずるは、人々の知る所なり。こは躰より發する、温たき空氣を保つべき、塲所の有無によりて、かくは異なる也。それと同じ理によりて、鍋は元來淺さき者なる上に、平面なる蓋を用ちゆるときは、蒸發せし温かき蒸氣を保もつべき餘地なきが故へに、下たより上ぼれる温度は、直ちに飛散して、上下より温むるの便利な



し。それのみならず、平らたき鍋蓋にては、中に入れたるもの蓋に付きて、甘きも辛らきも之に染み込み夏時等には、一種の臭氣を發して、移り香に堪へざることあり。之が不便を防がんとならば、圖の如く中高なる蓋を最も良しとす、こは木にてもよけれども、ブリキならば一しほ清潔にみがくの便あり。この蓋を用ゆる時は、大に薪炭の費をはぶくを得べしと云ふ。

經濟的漬物の鹽合

奈良漬、味噌漬、糠味噌漬等を一々算ぞゆるときは、我國の漬物は數十種に止まらざるべけれども、奈良漬は價高かくして常用に適せず、味噌漬は多量の味噌を用するが故に、多人數の家ならでは漬くるを得ず、其他菜漬、糠漬何れも醤油をどぶ／＼とかくるが故一に、下女下男を多く使ふ家にては、不經濟也。獨り醤油を用ひずして經濟なるは、澤庵漬なり今日は澤庵の漬け時なれば、今玆にその漬を加減を記るさんと思ふなり。

大勢の家にては、田舍より生大根を求めて、能く洗らひ、繩にて編み、掛け下ろしに便ならしめ、さて太陽に面せる庭の物乾ざほにつるして、大なるは廿日以上、細きは十二三日位を經ば、その表面縮緬の如くに縮むべし。この時は已に漬くるに適當なる時なれども、夜中の寒氣のために、凍ることあるは甚だ恐るべきことなれば、毎朝出たして、毎夕家内に入るゝの手數は、中々容易にあらざれば、小人數の中にては乾したるを買ふを可なりとす。

さてその漬方は、早く用ゆるものは、糠六升に鹽四升の割合にて漬くべけれども、夏を過ごさんと欲するには、糠三升、鹽七八升の割合にて、能く混和し乾大根一ならび毎に、糠一層づゝを振りかけ、上より重もきおしをのせをくべし、早く用ゆるものには、小米の混じたる糠も甘味ありと云へども、長く置くには腐敗し

て惡しゝ、黄金の如き美くしき色を得んには、粟糠を用ゆと云ふ。

經濟味噌の造り方

此味噌は田樂湯どうふの味噌となして味よく、刺身の上に上せて熱湯をかくれば即席吸物となり。夏時遠路を携へて腐敗せず、茶漬けの菜となして美味なるより、經濟味噌の名を得たり。求めたる金山寺、櫻味噌等は、高價にして腐敗し易ければ、經濟に心ある家にては、常にこの味噌を貯ゆるこそ良けれ。その造り方は、上等の赤味噌を能く擂り、別に柚子の乾皮、椎茸、乾唐辛等を水に濕たして小さく刻ざみ、味淋にて煮上げ、煮へたる後、味淋と、味噌と先きに煮上げたるものとを混じ、微火にてそろ〳〵と煮詰る也。

今日の遊戯

遊戯の種類は數あれども、時候に適して害なく、しかも面白き遊は、少しく考を廻ぐらすにあらざれば、容すくは思ひ當らざるべし。人々の喜び遊ぶべき今日の

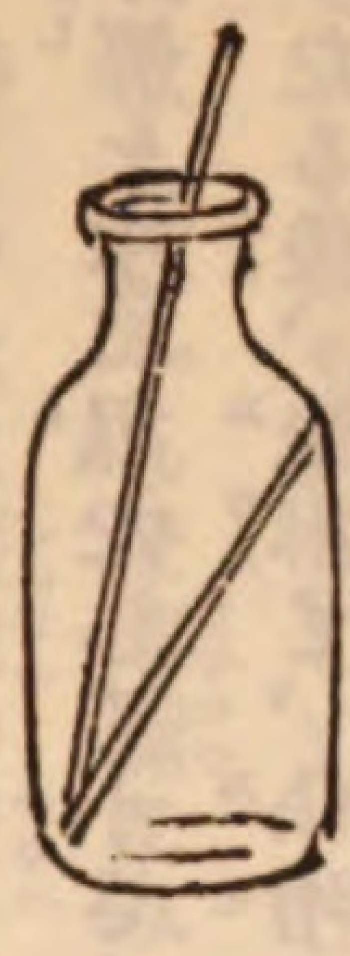


正月に當りて、誰れの家にても試み得べき、手易くして面白き遊戯の一二を、こゝに記るさんに、

一本の藁て瓶を釣り上ぐ

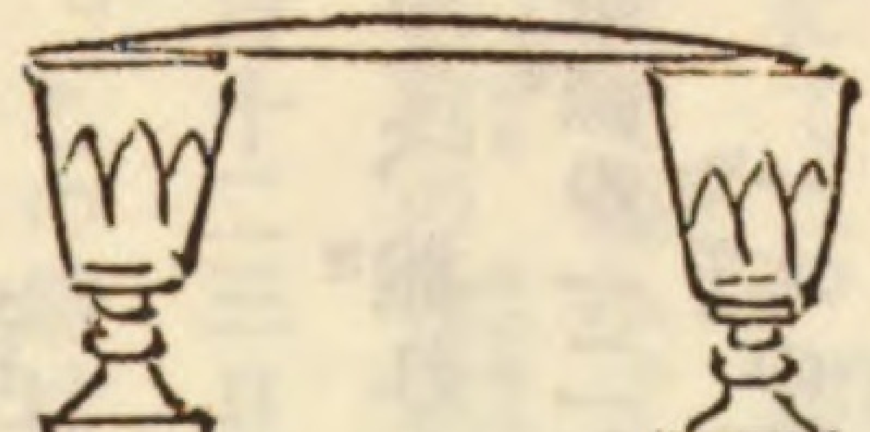
友人うち集どひたる席上に、強固なる一本の藁と、左

程重もからざる一個の瓶を持ち出で、この藁を用ひて瓶を持ち上ぐる人々には、賞として蜜柑を與ふべし、但だし藁は結ぶことを許るさずと云わんに、誰れも最初に浮かぶ考へは、結ばずしてよも瓶の上る筈はあるまじ、さるにても賞品のほしさよと、心あせる中、賢しこき人ありて、藁を圖の如く折りて、すつと瓶中にさし入れ、引きあぐる人あらば、中原の鹿は其人に落ちて、他は失望の外なかるべし。



割箸をコップの上に折る

手品かと疑かわれて、人を驚かすは、コップ上の箸を折りてコップを傷付けざると也。此のために用ちゆる箸は、甚だしく太とからざる箸の、全躰を同なじ細さとなし、且つその兩端は、圖に示めせる如く、少しく細くなしをくを要す。さて二個の全く等しき丈けのコップを取りて、箸の兩端をコップの端にかけをき、箸の中心と思ふ所を目ざして、强よく一打ち加ふるときは、コップは依然として立ち、箸は二たつに折るべし。



魔法かくし

客を招待して一夜の遊戯を爲さんと欲する人は、先づ客の入り來たりし時より心して、何か客の所持品の内にて、目に止まらず又た心付かずして隱くし得べき品を、注意して隱くしをくべし。さて之れより遊びを始めんとする時にあたり、客に注意して云ふ樣、之れより見へざる手を以て、皆樣の御所持品を奪ふにより、心して奪はれざれ給へ、若し御運拙なくして、奪われ給ふ時は、御氣の毒ながら、罰として此の方指定の藝

事を爲し給ふべしとて、數分の間緘默する時は、客は今や魔法の手にて觸れられんかと、びく／＼して注意すべし。それより何か己が物品を取られしとに心付きて、早くその事を云ひ出だせし者は、免るし。尙ほ取られしに心付かざる人は、罰を受くべし。

寶の取り次第

同じく一つの品を與ふるにも、客を招きて遊ばん目的には、興ある與へ方こそよけれ、金米糖、甘なつとう、寶來豆等の如き菓子を出だすに當りては、之を大人の手の僅かに出入するに適する程の口を備へたる、壺の中に入れ、取り得る丈け客に任かせて取らしむべし。慾深かく、大なる手の人ありて、少しも多く取らんと欲し、中にて多く握る時は、手出でざるが故に、おしくも量を減せざるべからず、小さき手の人は、手少さきが故に、始めより多くは握り得ず、かくて群集の得る所、大かた平等となるべし。其中上手にして多く握り取りしものには、またそれ／＼の賞あるべし。

手藝案内

六種の頭巾

今や西洋舶來便利の品入り込み、在來日本的の頭巾大に廢せられ、只だ婦人用のみは其儘流行す、玆に其流行と不流行とを問はず、六種の日本的頭巾の製作法を記して讀者の參考に資せんと欲す。

六種の頭巾とは何ぞや、曰く大黑頭巾、曰く宗十郎頭巾、曰くおこそ頭巾、曰く早道頭巾、曰く船底頭巾、曰く吉原頭巾。

大黑頭巾を着用するものは重に老人か小兒か寺院の人なり(但し三河萬歲の才藏も着る)則ち之を製するには常巾四角を圓形に裁ち切り、裏と表とをあはせ、其周圍に稜襞を八個ほど折りて躾糸をかけ緣をつく、其の

最も小なるものに至りては十二の稜襞をつけるも宜しく、縁巾は五六分を以て通例のものとし、赤兒の頭は廻り、大低一尺を以て足れりとす、小兒用には赤色の縮緬類の美麗なるを撰み、老人用には地味なる縮緬類か左なくば呉絽の如き手丈夫なるものを用ゆるも他の布帛地を撰ぶも随意にして可なり。

宗十郎頭巾の小兒のものは中巾にて四尺八寸位ひを要し、裏は一尺八寸、頭の大きさは大低一尺四寸、垂の長さ一尺五寸頭の長さ九寸を以て通例のものとす、大人ものは大巾四尺六寸を要し、裏は二尺もあらば充分なり、其寸法は垂一尺八寸頭の大きさは一尺五六寸にも仕立つれば間違なけん。

おこそ頭巾は今や婦人間に第一に尊重せられ、又婦人社會の第一の流行品となれり、之を製作せんとならば縮緬又は唐縮緬の布帛地（無地則ち摸様なきを撰むべし）四尺を取り兩端より一尺五寸宛の所に小切を以て兩耳を引懸くやうに「耳懸」をつくる、則ち兩耳の間は一尺となるべし、（但し耳と耳との間の廣狹により耳より額にかけ又耳（下りて其間の寸法を定めて長短を見計ふべし）而して耳と耳との一尺の間には必らず一尺二三寸の唐縮緬を用ゆべし、假令表地如何なる上等のものなりとも必らず唐縮緬を取りつくべし、何となれば耳と耳との一尺の間は頭髪の當る部なれば頭巾に油のしみるゝの患なしとせず、唐縮緬は能く油氣をはぢくの效あるものなり、其表裏の布帛地、色合等の流行及其他仕立法の順序等の事情は本雜誌第三十九號（廿七年十月十日發兌）の手藝案内及流行の栞中に詳しく記し置きたれば就きて參照ありたし。

早道頭巾はおこそ頭巾と同じく頭巾の眞中より顔を出すべきものにして、通例一尺七寸巾のもの四尺を以て製作し得らる、其法は大略おこそ頭巾に同じ。

船底頭巾は大巾ならば四尺木綿巾ならば八尺を要す、

其裁方は布帛地を竪に富士山形に裁ちて表と裏を取りて調製すれども、今は全く廢れたり。

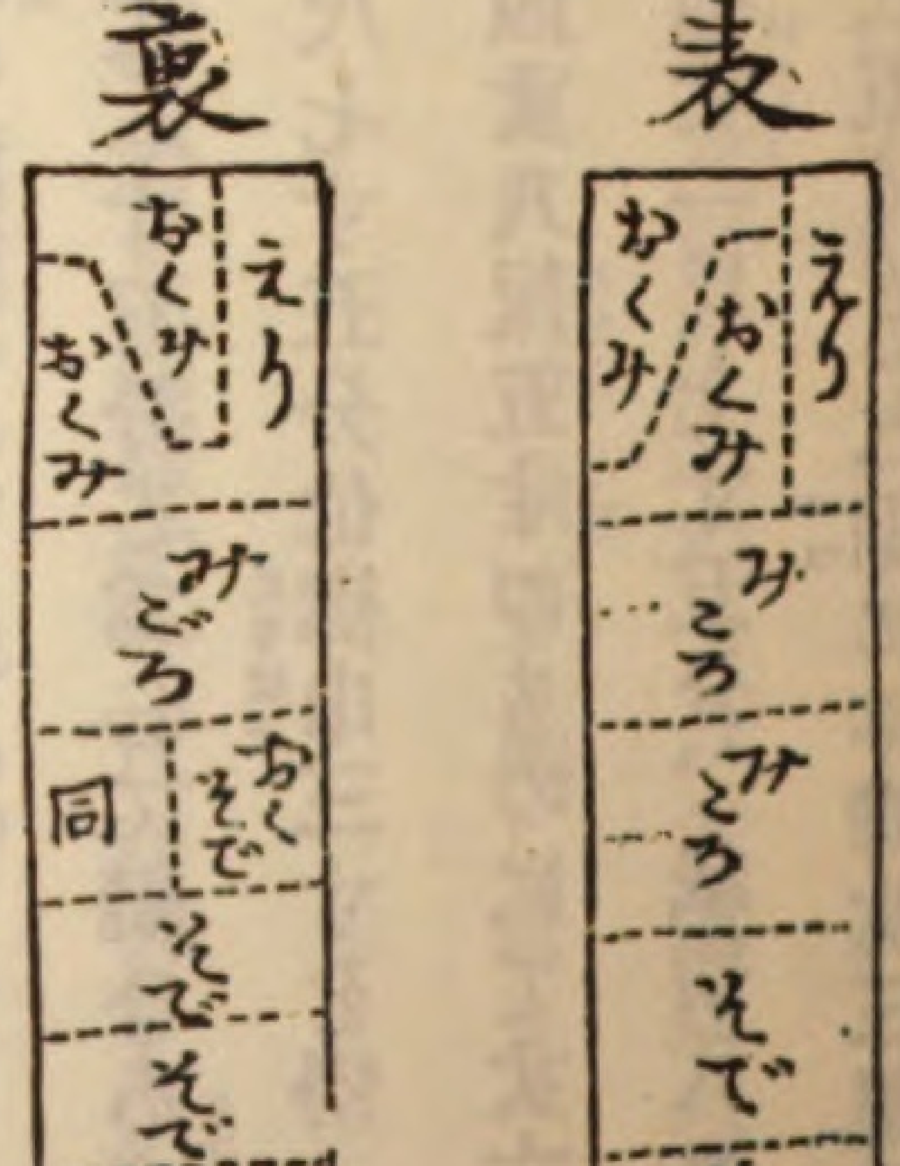
吉原頭巾は常巾五尺にて製す、則ち丈を一尺となし、巾は下を其儘上を七寸となし、五寸の襠を三角に裁ちて後の上の方を圓くなして縫ふ、此形も今はすたれて着用するものなし、然れども此道の人の參考のために斯くは物しつ。

廣袖と夜着と蒲團と

去る五日午前十時寒入となりぬ、これより『小寒』『大寒』の間寒氣彌増るべし。

茲に廣袖と夜着と蒲團の仕立法をしをりすべし。

廣袖の仕立は通常ものにて表丈け二丈七尺三寸を要す、之にて丈三尺八寸五分を取り、衿衽丈五尺五寸衽巾五寸五分かぎ下一尺七寸袖三尺二寸を裁ち得らる、裏は丈け四丈なくては足らず何となれば廣袖は綿を澤山入るゝものなれば裾も袖口のフキも勢ひ廣からざるを得ず、則ち丈を五尺五寸にして裁切四ッ、袖一尺六寸にして、裁切六つ、衿衽八寸二分かぎ下三尺とすべし、其裁方は



縫方の順序を記せば(第一)表袖に裏袖を縫ひつけて陰躾糸を施す。

(第二)袖下を縫ひ躾糸をかけ脊縫、脇縫を終り袖をつく。

(第三)前巾をはかり衽をつけ衿をつく。

(第四)裏を表に準して縫ひ裾を合せて褄下を縫ふなり。

入る。

(第五)襟先を四寸程綴ひて躾糸をかけて後襟より綿を入る。

(第六)引返して襟と奥袖をつけ他の縫ふべき部分をも綴ぢ合はすべし。

扨布帛地は如何なるものを用ゆべきか、臥床中身體に接近し居るものなれば蒲團又は夜具地の如きコツ／＼したるものは適當の品にあらず、上等ならば黄八丈か八端か其他絹物を用ゐて宜しく、平民的に製せんとならば八丈木綿の如きものを用ゆべし、さりけれども餘りベラ／＼するものは洗濯に不適當なれば少しは丈夫なる方德用なり、襟は共布帛にても又は天鵞絨を用ゆるも可なり、綿は薄手のものにても一貫目厚きものにて一貫五百目を容るれば充分なりと知るべし。

夜着には三種あり曰く小夜着、曰く中夜着、曰く大夜着是なり。

小夜着の寸法は丈四尺五寸、袖丈一尺五寸、綿は廣袖と略同様と知るべし

中夜着の寸法は丈四尺八寸とし、袖丈を一尺六寸とし綿は小夜着より二三百目増加するを通例とするなり。

大夜着の寸法に至りては五尺二寸を丈とし、一尺七寸五分を袖丈とし綿を二貫目内外を容れて以て一領の夜着を製す、其裁方は左の如し。

譬へば二丈八尺一寸のものにて表を裁つ時は、丈三尺九寸、袖三尺五寸、襟衽五尺五寸とし、衽巾五寸五分、かぎ下一尺六寸五分と爲して縫ひあぐれば、丈五尺一二寸袖一尺七寸五分位襟巾三寸を得べし。

裏は總丈四丈八尺五寸のものにて丈六尺二寸五分、裁切四ツ、袖丈一尺七寸五分、裁切八ツ、襟衽九尺五寸かぎ下三尺五寸とし、別に半襟丈三尺五寸肩當同様(天鵞絨又は其他の布帛を用ゐて妨なし、此縫方は大畧廣袖と異ることとなきも、袖下へ燧切をつくるの小差あるのみ。

夜着には如何なる布帛地を用ゆべきか、贅澤を言へば錦襴緞子などゝ随分六かしくなれども、丈夫向にしてさつぱりしたるものを用ゆべし、これには更紗木綿第一の品たるべし、其他の紺木綿其他任意の木綿を用ゐて差支なし、絹物は洗濯等に不便なり。

蒲團は大抵丈を四尺三四寸より七八寸迄とし綿も大抵一布につき二百五十目より三百目を度とし、此標準によりて増加すべし、今二三の例を擧ぐると左の如し。「

三布蒲團を丈四尺六寸に仕立てんと欲さば布帛地二丈七尺九寸を要す、四尺八寸に仕立てんとせば二丈九尺を要すれども、大抵一反の丈は二丈八尺なれば四尺六寸に仕立つる方利なり、綿は七百目より一貫目を要すと知るべし。

五布蒲團をして丈四尺六寸ならしめんには四丈六尺五寸の布を要し、四尺八寸とせば四丈八尺五寸を要す、綿は一貫三五百目。炬燵ぶとんは其角を丸く縫ふべし。」

縫方は第一に二布を縫ひつけ、三布目に裏の方を三尺程縫ひのこして綿を容れて引返すに便にし、他の部分を縫ひ躾糸をかけ、綿を入れ引返してくけて綴づるなり、蒲團は平坦なるものなれば、縫方は困難ならねども、綿の村々にならぬやうに入れべし、絎け終らば所々に綴糸(重に萠黄糸)を施し置きて綿の散逸を防ぐべし。

布帛地は夜着と同様手丈尺なるを用ゆる方徳用なり、手織木綿の類隨一たるべし。

毛糸の「ヅボン」下

温煖を保つは毛に如くはなし、茲に毛糸の「ヅボン」下の編方を掲ぐべし。

角六寸の針四本を用意し、足指の頭より順次に腿方へ、則ち下部より上部に編み行く。

最初足頭六十八本を三本にかけ、左右にて二寸口編を施し一寸五分眞直に編み、これより次第に編目を増し、

五回目五回目に一づゝ增加して一尺編み一尺の間に十六回增して後、一寸平坦に編み、糸數合せて八十四となる、又た股の下にて七寸五分の間にて三十六本を增加し、合計糸數百二十となる、斯の如く双方編み合せて夫より股の廻となり、双方の糸合計二百四十本を以て股の部一寸を編み、其後は順次に目數を減少したる後、眞中と前の明とにて糸數二百十まで目數を減ず、これより五回目每に一個宛を減し、前方双方にて減じ後方にて十、又前方にて十宛減す、此處六寸五分と見積る。

コヽにて四本針を止めて鉤針にて編むなり、其編方は鎖編にす、其の後襟編を前口鎖編にて一寸巾ほどに編む、上前は「ボタン」の孔を二ッ又は三ッ明け而して後後方のみ襟編を爲すこと一寸。

斯く爲し終らば前と合せて一寸編み、又上前にて「ボタン」の孔を明けて編み終らば、此出來上り丈け二尺七寸を得べし、其後「ミシン」編を周圍に施す。

右の編方大人の丈に應じて仕立つる方法なれども、大小意の如くせんとならば、最初編み始めの糸數の多少によりて製し得らる。

毛絲の色は如何なるを用ゆべきか、「ヅボン」下は最も身體に密着するものなれば、色物にては色の移らふ恐あり、如かず白か他の淡色のものを用ゐんには。

黑色の染方

黑染中の簡易にして有効なるものを擧ぐれば清水二石に硫酸一合程の割にて注入し能く攪ぜ、之に續きて硝酸鐵一升五合（清水二石硫酸一石の割合に應し）を加入して能く混淆し、染めらるべき反物又は糸類の端より此液中に繰り入れ、暫時にして之を取り出し、又直ちに液中に戾し入れ、一日にして之を取り出し、棒を以て液中を攪きまぜ、直ちに染物を浸して一夜を過し、翌朝に至りて又之れを取り出し、清水中に洗ふこと三

回、然る後竿に打掛け、極めて温暖なる室内に乾すを要す。

若し又大幅の織物を染めんとならば、譬へば大幅の絹織四丈の割に「ロクウード」汁七升五合「フスチック」汁七升五合を銅鍋に入れ、徐々に温度を與え、焚くこと三十分時許、一と先づ之を取り出し液中に手を浸して其温度の高低を試み、手を浸すに其熱度に耐ゆるを以て度とし、（必らず其熱度に超過すべからず）其液中に染物を浸入せしめ、十分時毎に一回宛液中より取り出し、浸し方の變轉を行ひ、一時間を過ぎて悉く之を廢止し、更に別鍋中に姜黄一匁八分七厘（絹四丈の割合にて）を投入し能く溶解すること三十分時にして取り出し、干竿に打かけて水氣を滴し去り、更に別器に温湯を以て石鹼を淡く溶かし、其溶汁中に入れ直ちに取り出して悉く水氣を絞り去り煖室にて能く乾かせば見事なる黒染を得らるゝなり。

社文一斑

流行の栞　　春夢

都の春

每年歳の首に於て春夜闘々の光景を記す、本年も例に倣ひて聊か都の春の色模樣を寫して讀者の一粲に供せんと欲す。

重に記すべきものは衣服の事情なれども、木枯の空寒き冬さしなれば、たさへ新春を迎ゆるとも男は外套頭巾に身躰を包み、女はおこそ頭巾や肩掛に半身を蔽ひければ、甚だ觀察に苦しめども、年始廻りの間々に紳士淑女が外裝を脱ぎ去りて新年の禮儀を申さるゝ瞬間を拙き筆にて早寫し、眞に當るか否やは知らねども、見て來たまゝをざつとさらく次の如し。

◉萌黄木綿の風呂敷包を首に引かけさせたる小僧を従者に連れ年玉を得意先に配り行く商人の風俗を見るに、多くは黒七子三ッ紋の羽織に糸織の上着、同地質淡色の下着二枚若しくは三枚を重ねたり、帶は博多の鼠か鐵色かの無地か、微塵崩し縞をメむる連中澤山にして、袴は藍棒縞の仙臺平、裏は紺甲斐なるか如し、併し略式にして袴を着用せざる向

な見受けたり、履物は丈高からず低からざる南部表に鼠の鹿皮を穿きたる風情、ドコまでも着實なり。

◉右に引代は派手風なるは世に紳士とか持囃さるゝ連中なり、烏打帽子を被らせたる白襦袢の車夫に汗を浸ませ威勢よく高蒔腕車に悠然と打乗り破風の反身を爲して巻煙草を吹かし行くも外套頭巾の妨ありて明々地に其着服の消息を知り得ずと雖も、年禮家の前に車を止め、外套を脱きて車に投げかけヌッと門構に入らせらるゝ寸間を見奉つるに、羽織は黒市樂若しくは黒七子の三紋羽織（偶に五ツ紋もありき）衣服は淡色微塵の市樂、下着も上着と同質風通織かお召紋織かに見受けらるゝもの多く、帽子は黒の山高、袴は練仙臺の鼠竪縞に鼠甲裴絹を裏地とし、博多紋織か繻珍の帶とは隨分柔氣たる扮裝なり。

◉衣服、羽織、袴は紳士風と異なれど頭に法官帽子を戴き、足に紐付の足袋を穿ちて三々五々列を爲して往來する人々を見受けたるが頗る古風なりし

◉日清戰爭の影響を受けてや、凡ての流行品戰爭の緣ある裝飾を爲したるは俗に流れたるも、之が爲め又男らしき扮裝を爲すもの多かりき、譬へば衣服、羽織の丈の短きと、絣の如きイカツキもの流行せり、是等は社會が平民的流行の傾向を顯はす兆なれば、寧ろ賀すべき事也。

◉三十五六より四十前後の令閨風の婦人の重なる春衣を見るに、黒縮緬のフキ模樣三枚重を召し、明には洞察し得ずと雖も、長襦袢は鼠紋鹽瀬最も多く見受けられ、半襟は白紋鹽瀬眞に多數なりき、帶は繻珍無金模樣の丸帶、履物は藤表と見紛ふばかりなる純白の南部、黒木塗、臺は高き方なりき、鼻緒の色は鐵色、利久鼠なんどが最も多かりき足袋は白羽二重三枚小はぜもの多かりき。

◉三十前後の令閨らしき人を見るに、鼠縮緬のフキ模樣若しくは裾模樣にして紋壁中形の半襦袢、而して白紋羽二重の半襟を纏ひしもの多かりき。

◉令孃の扮裝の多數を占めたるは貴族鼠、藤鼠、淡草柳、うす利久、さくら鼠等の流行色縮緬の裾模樣三枚重に、幽禪縮緬や緋の中形縮緬の長襦袢を合はせ、帶は繻珍の丸龍模樣の如き丸形模樣多く見受らる、色は黒、お納戸、肉色、さくら鼠等多かりき、而して後邊に小女を從へ肩掛や黒縮の紋附羽織を携はしめたりき、但しこれは令孃に限らず、令閨にも此風俗あるを見受られき。

◉高家の細君らしき新年禮廻りの禮裳を示せば、お召縮緬の上着、同地質變り柄の胴拔下着貳枚らしくものを重ぬるものか、又は同地質の上着に利久鼠、千歳茶の紋鹽瀬の下着を胴拔にしたるものを合せたるも多

かりき、帶は黒地繻珍の丸帶、黒縮緬の三ッ紋羽織を着たるもの多かりき、但し羽織の裏地は紋璧か緞子多かりき。

◉又上着を縞お召にして下着を更紗縮緬の胴拔にし、小紋縮緬の三ッ紋をはなりたる高家の細君らしきものも多く見受けたりき。

◉貴家の娘子の風采をうかゞふに、お召淡色の立縞若しくは繋ぎ絣の上着は紋璧中形の下着を合せ、帶は繻珍の淡色大形模様、或は小柳織(西洋)小柳繻子(桐生)等の淡色丸龍や向鶴、松竹梅巴形目立ちぬ、羽織は黒縮緬三ッ紋五分、淡鼠、あゐねずみ、利久、淡菜等の三ッ紋五分の割合なりき。

◉婦人衣服の模様にあらざる衣服の裾裏は惣して珍色の縮緬に限れるが如き觀ありき。

◉被布の流行は益々盛なり、五六歳より十歳内外の小女が幽禪縮緬を着たる姿の可憐なるは言語に絶すれども、近來一種の社會のものまで被布を着込み束髮を結ひてチンと澄せる顔せるに至りぬ、新年元日中最も派手の絶頂の扮裝に見受けたるは、六十許の老媼が鳩羽色の奉書の衣服三枚重に肉色の裾裏を見せ、燃ゆ立つばかりの卵色の被布を着して年始廻りを爲すにてありき、華族の御隱居様にやあらずらんと、其影を見送りたるに酒屋又は高家の店頭に於て應接せるを見れば、一々教會さかの教導職が信徒の家を訪ふにやと思はれけり。

◉男子の外套は後ろに襞附、帶に二個ボタンあるもの非常の勢力を以て流行しぬ、地質は羅紗、「スコッチ」の淡色無地か、こまかき格子縞最も多く見受けられたり、二重廻形は着用する稀有と申して可なりき、婦人の肩掛は淡色の縞模様か友模様に限れるが如し、色々ゴタ〳〵したる模様は全く行はれず、駱駝の毛織も西洋婦人の外は一も見受けさりし。

◉婦人にして男子専用の大島紬の上着に同しく大島紬の珍縞の書生羽織をひつかけ、お召縮緬の荒き下着を五分長に引きずり雪駄チヤラ〳〵、大道を我物顔に歩くものと、お召縮緬の衣服羽織に斜綾又は茶鼠の羅紗の長合羽を着て悠々たる風俗は記者嘗て其何物たるを知らず。

◉婦人新年髮具はあられ形の稍長形の笄、櫛は鼈甲の中京形にして、蒔繪の政子、おはつを挿みたるもの多かりき、中等以上の娘子の花簪はお目出たき摘細工なれども、中等以下は日清戰爭にちなみあるものを多く飾りぬ、髮風は丸髷はぼたん形多く、又丸帶よりも寧ろ角髷ともいふべき角ばりたるもの、若しくは意氣を衒ふものは歌舞技形、米屋町形に結ひぬ、妙齡の人は少し痩形の島田其他は銀杏なれど、根は概して高き方なりき。

日用品物價（一月六日）

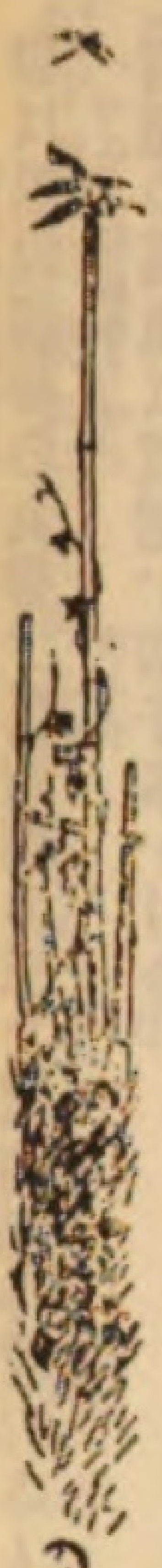
◎白米小賣相場　（一圓に付）一等白米八升●二等白米八升三合●三等白米八升七合●四等白米九升二合●五等白米九升五合

◎雜穀　●本質大麥二升六斗●腸場大麥二斗六升五合●肥後上小麥一斗九升二合●同麥安一斗八升●船橋小麥一斗九升三合●常州小麥一斗〇五合●下總小麥二斗〇●札入竹林麥一斗三升〇並一斗四升〇●上割麥一斗三升五合並一斗四升五合●佐野搗粟一斗二升五合●千葉小麥一斗九升八合●南京白大豆一斗八升●同青大豆一斗八升●同瀞色小豆一斗四升●同白小豆一斗四升●八戸大豆一斗八升三合●粕壁瀞色小豆一斗四升●目無白さ一斗一升七合●木石上大豆一斗八升●南部大豆一斗八升五合●越後大豆一斗六升●吉原大豆一斗七升●室蘭黒豆二斗〇●川越豌豆一斗六升五合●川越白さ一斗二升●本場平豆一斗六升●北海道青豌豆一斗九升五合ヵ二斗●鍋隱元一斗五升七合●室蘭空豆一斗九升五合●室蘭小豆一斗四升●中手小豆一斗四升五合●川越木場金時九升〇●庄内平豆一斗三升五合●銚子隱元一斗〇

◎鹽　●赤穗三俵七分五厘●大鹽幷に八家三俵八分五厘●本齋五俵六分●新齋六俵〇

◎砂糖　●稀車卅三匁四分ヵ次三十二匁九分●台安十七匁二分●無類黒十七匁●初雪廿八匁四分●天光廿八匁二分●新製初雪廿八匁八分

◎繰綿　●三州文庫入八百二十目●尾州文庫入八百二十目●武州地綿極上八百七十目●唐白綿八百八十五目●同雪飾八百九十五目●同九花印九百〇五●同花印九百〇五目●同雜名品込九百廿目ヵ卅目●赤大德印一貫三百五十目



雜　録

山嶺探撿の發達（四）

山嶺及積雪界に對する吾人の畏怖心は、斯くして消滅せられざりせば、確かに倒覆し始めたり。而して次の半世紀の間に漸々其消滅せられたるを觀る。ジヤンクフロー山は千八百十一年に、フインステルアルホルン山は千八百十二年に探撿せられ、其他の山嶺も亦順次に探撿せられぬ。去れど斯等の登山は、要するに箇々別々に企圖せられたるものなるが故に、吾人が適當に名くる所の登山術なるものは未だ發見するに到らず。而して其是れあるは探撿隊の興りし時にして、實に千八百五十年頃なりとす。斯探撿隊は年毎に登山を試み、高く雪界線以上に踏み入りて、漸やく幾多の經驗を重ね、各々登山術の端緒を啓けり。千八百五十年より千

八百六十年に到る間、幾多の人々は、登山を一の遊戯として試みたりき。就中、千八百五十四年、今のジャスチスヴイルス氏のウエッテルホルン山登攀は、最始の重要なる遊戯的登山と思惟せらるゝものなり。次てローサ山の最高處は千八百五十五年に於て達せられ、千八百五十六年、英人の一隊は案內者を用ひずして、新路よりモン、ブロンに登りぬ。而して「アルパイン」苦樂部が倫敦に創設せられたるは實に其翌年に在りとす。諸外國は相續いて英國の組織を摸倣し、斯くて山嶺探撿に急足の進步を視るに到れり。

「アルパイン」苦樂部の第一期は山嶺に對して尙ほ幾多の舊態を存したりき、而かも斯舊態は漸く消滅せられぬ。經驗が經驗を積み、觀察が觀察を重ぬる間に、雪積界に固有なる危險の性質は看取せられ、隨つて之れに對する防護の方法は發見せられぬ。探撿隊の人員は幾干を以て適當なりとする乎、雪、巖角に遭ふて如何に繩を使用すべき乎、四季における雪の狀態は如何なるものなる乎、雪、氷、巖石の突落に對しては如何に警念すべき乎、凡そ斯等百般の事柄は經驗と考慮とを以て攷究せられたり。今や、吾人は吾人が安全に跋涉し能く箇所を識り、又如何にせば安全に跋涉し能ふかを知る。而して斯知識の實際に應用せらるゝものを稱して登山術とは云ふなり。

斯の如く、アルプス山探撿より發達したる登山術は、既に他の山嶺探撿にも、濶く應用せられ、ピリニース山探撿の如き、亦一の困難を覩ざりき。去れどコーカス山は全く特異のものにしてアルプス山よりも一層高く、一層雪多く、又全躰より云ふも一層嶮岨なり。加ふるに氣候も一層良からざるが故に、四時倶に屢々大なる雪落を生ず。斯山の高處探撿の主なる榮譽は現「アルパイン」苦樂部會長デー、ダブリユー、フレッシフイールド氏に歸せざる可からず氏は嘗て斯山に登りし

（千八百六十八年に於て）最始の探撿隊の一員にして氏が、其際にものしたる登山記事は、他の探撿隊を鼓勵し、遂に其探撿をして今日見るが如き進歩を遂げしめたり。次で第二隊は千八百七十三年に、第三隊は千八百八十六年に斯山に登り其以後に到つては殆んど每年の夏季コーカス雪中に探撿者を看ざることなき有樣なり。而かも大「コーカス」時代と稱すべき年は實に千八百八十八年なりき。コーカス山中に在りて、就中コシタントー、シカラ、ジヤンガ、ウシバ等の高峯は、最始に英人の三隊が相前後して順次に登攀したる處なりき。然れども山嶺は亦た慘酷なる報復を吾人に與へたり。ドンキン、フオックス等の諸氏は彼等の瑞士案內者と共にヂチトー山登攀の中途にして死亡し其遺骸は深く山中に埋れて遂に發見すること能はざりき。

紅葉（上）

八萩生

小豆島なる寒霞溪は、如何に奇巖怪石に滿ちて、天下の遊客をひく事も、如何に多きぞ、其麓に、下村なる村ありて、寒霞溪の案內は、此處よりぞする。

村の西の端に、あわれ軒傾ける、白屋ありけるが、此家の主人は、則ち貧しき寡婦にして、十一歲の『とめ』と名けし、一人の、可愛らしき、鳶色の眼を持てる娘の外は、誰もなく、實に憐なる、二人の家族なりき、されど母の慈愛と、娘の心は、愈樂く覺へけり。

天は、日々寒くなりぬ、朝霜は野原に白く、寒霞溪の楓の色は、漸く去せて、黃色と、紅色とに變りぬ、されば、冬も愈近くなりて、貧乏人には、如何にも、不親切なりける。

母『とめ！私供は、此冬は、裏の土倉に、澤山の薩

摩芋があるから、餓はせぬが、衣る衣物がない、夫かと云ッて、新い衣物を、こしらへる事も、買ふ事も出來ぬ。

とめ『それならば私供は、舊い物を衣たらどふです。

母『けれども、其衣物は、薄いから、外に出る事も、出來ません。

とめ『でも私供は、幸ひ寒霞溪に、木が澤山ありますから、凍へはしません。

斯て十一歳の小女ながら、考へ深く、又『とめ』の鳶色の眼は、非常に困難を感ずる如く見へたりき、ア、『とめ』は、夏の日緑濃かなる時は、囀る鳥の、飛び廻る如く、林中を、遊び廻りて、未だ嘗て、冬と云ふ考はあらざりしに。

ア、『とめ』子は、母を助んとて、何事をなせしぞ、母にして、食物の欠乏を考へしならば、『とめ』子は森の中に、栗もありき、椎もありき、ものを、あわれ、衣るべき處の仕事は、十一歳の小女には、如何にして之を考へ、之を助くる事を得んや、されば『とめ』子は非常なる、苦心をなして、如何に彼の小き心を困ませしぞ、彼女は、梯子段の下に、迷惑なる顔して、坐り居しに、其朝覆盆子を以て作りし紅の頸輪を見ぬ、頸輪を見ては、彼は落葉の衣物を縫ふ（而も輝き渡る紅葉にて）事なる、一種異様の考へを起しぬ。斯くして彼女は、多少母を助け得べき事と思へり、糸巻と、縫針とは、袂に入れられて、母に一言なく、一直線に寒霞溪に走り行きぬ、寒霞溪へ走り行くや、何の困難もなく紅葉を集めぬ、而も太陽之を照す時は、目を眩する許り紅き葉を、彼女は之を以て、前垂に包み、仕事の用意せんとて、低き、偏き石に、腰かけつゝ、前垂より紅と黄の落葉を、振ひ出しければ、彼女は西洋の所謂、森の女王の如く見へき、彼女の小き指は、非常に早く、非常に巧に、動きそめて、葉は葉に縫ひつけら

れ、今や小形の衣物作られて、彼女に恰好のものは出きあがりぬ。彼女は自らを見まわして、愛度氣なき笑をもらしつゝ、獨口ちぬ。

とめ『私は立派だろう、衣物は立派であるが、髮がこんな、刺し古びた簪ではいけぬから、はて、どふしやう。よし〳〵紅葉の枝で。

彼女は直に折り取りて、一風しやれつゝ之をさしぬ、此時は眞に西洋の林中の女王の如くなりき。

元と葉を縫ひ合せたるものなれば、山路を分るも非常に注意して、破ぬ樣につとめ、母に示して、幾分の慰とせんとは、其殊勝さは如何に。今や寒霞溪を外れんとして、彼は驚き止りぬ、一種の人は、彼女の前に、曲りたる腰掛によりながら、長き三本の足持てる、太き箱を以て、何事をかなしつゝありしが、一種の人も亦、彼女を見て、彼女よりも、一層驚きたる有樣なりしが、彼女が驚の儘又た林中に、走せ歸るを見るや、彼は呼び止めて曰く、

奇『御前は何だ、誰がそんな身なりにしたの、

彼はかく云ひつゝ、可愛き、愛度氣なき彼女の爲に、如何に笑を洩せしぞ、

とめ『私は『とめ』です、自分で此衣物を作りました、どふです、奇麗でしよふ、

奇『そーだ、じやが何で御前は、こんな事を考へ出したの、

とめ『ハイ……

彼女は少しく口籠りしが、かくてあるべきにあらざれば、母の貧乏なる事より、己が履歴まで、十一歳の口にかけて、話しければ、奇人も或時は笑ひ、或時はあわれを催ふして涙を流しゝが、更に語をつぎ

奇『ア、御前は、今暫時静かに立て居る事は出來ないか。

彼女は一言も逆わざりければ、三本足の箱は彼女の前

にすへられて、奇人は直に、仕事にかゝりぬ、之をしばらくして、

奇『もしよろしい、動いてもよろしい、疲れたら其石に腰を休めな。

再び立てと云わるゝまで坐りしが、奇人は再び立たしめ、又も仕事にかゝりぬ、されど時長かりし爲め、兩足感覺を失ふ迄も忍びこらへしに、

奇『よろしい、こッちに來て、之を見な、どーだ。

彼女は奇人の傍に行ぬ、行きて立ぬ、立て見し者は、果して何物なりしか、計らざりき、こはとめ子の像、而も紅葉の、衣物を衣たる、鳶色の眼、黑き髪、淡紅色の頬をなしたる、可愛きとめ子の像なりき。

とめ『どーして是が私ですか。

奇『どーのこーのと、何もかも御前だ。

と云ひつゝ笑ひぬ、

とめ『ア、私は下駄をはいたら善かッたに、內には立派な正月ばかりはくのがあるに。

奇『はだしの方が、いゝよ。

やがて懷をさぐりて、一枚の紙幣を取り出しつゝ、紙に包み、

奇『之をね、あげるから、失ん樣に、母樣に見せて此冬の立派な衣物を、買てお貰ひよ。

と云ひて、とめ子の手に握せ、

奇『左樣なら、明日又た來るよ、

一騎朔風に驅る

（口繪の繪解き）

朔風秋草を吹き斷ちて見渡すかぎり漠々たる砂磧天に連り、風頭大刀の如く、寒威人に迫れり。

灰色の空は滿州の野を壓して、枯枝に激する寒飈ヒュー〳〵と鳴りつゝ雪を捲き來り、乍ちに急遽、忽ちに

徐緩、宛ら戰ひを挑むもの丶如く、宛も人と相搏つに似たり。獨り舍營地を發して遠く敵を窺ふに、滿目の黃砂小山燉、敵燉。斥候一騎朔風に驅る。
戞々鐵馬氷を蹴る音!
越へ又越へて限り丘陵の彼方に去り、渉り又渉りて名も知らぬ無數の溪間を往く。野禽を驚かして敵かとあやまちしもの幾度ぞ。尾花を望んで旗影かと疑ひしもの幾度ぞ。
此くの如きは實に我が遠征軍の現狀なりとす。猶北風に傲る梅花の如し、淸香は凜々たる意氣の中にあるなり。

時事一斑

新年

今年の新年は一般に質素なる新年なりき。然れども同時に沈着なる勇氣と快意とに充ちたる新年なりき。實情は漸く虛僞を壓せんとす。

行軍中の新年

新なる年は西長崎より北千島のはてまでを見舞へると共に、旭旗の飜れる渤海の渚にも滿州の雪の中にも來れり。顧ふに遠征の途に於ける新年は如何に立ちたるべき乎。

石黑軍醫總監は語れり

今や我兵は淸國盛京省の半を占領し北は遼陽附近より南は旅順口に至るまで凡九十里の間に駐屯し猶も敵兵に向て進撃しつゝあるなり寒氣は北方に進むに從ひ漸く劇しけれども概して我北海道札幌地方の度合なり但戰地の事なれば雪の夜に屍を埋めて立つことあり霜の晨に風を凌ぎて進むことあり居を定め暖を取る事頗る難ければ寒氣の度合は異らざれども札幌地方に於て暖爐の傍に冬籠するものとは自然相同きを得ざるなり

居住は前述の如く戰爭のことなれば山中溪間に露營する事あり天幕の下邊に雨雪を凌ぐことあり苫舍土舍にて夜を過すことあり鳳凰城太孤山等の如く煉瓦屋に舍營するあり又旅順口の如く眞の兵舍を尋ふて其中に起臥するもあり一定す可からずと雖も概して現時は家屋に宿舍するもの多しと知るべし固より亂後のことなれば家屋は假令煉瓦石造にても戶障子等は有るやなきやの有樣にて美麗なる天井の下に焚火して夜寒を凌ぐが如きは各々共常態なり

衣服は兵に在りては平常の冬服(綿フランネル襦袢、同股引、襟布、靴下、ラシャ外套、毛布一枚、騎兵砲兵には此外に手套)の外更に特別防寒用として厚毛皮製頭巾、同製毛皮內襟付外套、フランネル襦袢、毛メリヤス股引、同靴下、紙子製下着、同袴下、厚毛布手套、毛布一枚を增加

い給與され近日は其上に大毛皮一枚をば着服用兼敷物用として給與せられたり人夫には（人夫元自ら願て募集に應じたる者にして其給料も兵卒に十倍し隨意の衣服を用ゐるも妨なければ別に給與するに及ばざる譯なれど）特に防寒用として紺小倉綿入、紋羽裏刺子の頭巾、同上衣、同袴、綿フランネル襦袢、同股引下、厚足袋及毛布一枚を給與せらる又先頃より兵卒となく人夫となく毛布裏の足袋、藁製ツマガケ、厚靴等をも送附せられたれば今は已に着到し各自之を用て寒氣を凌ぎ居ることなるべし

食物は先づ一日に精米六合と肉四十匁を標準とし之に野菜等を取交ぜ給與せらる但戰の都合により急に進軍して糧食後れたる時の如きは只飯と梅干とにより飢を凌ぐことあり玉蜀黍を加へたる粥にて一日を過すこともなきにあらず又都合よく分捕等多き時は朝は鷄、晝は豚、夜は牛といふ如きこともあり衣食住の状態は實に如此一定せず急に敵を襲ふ時は前述の防寒具と雖も之を打捨て身輕く出立て進擊せざる可らずかゝる時に當り通常冬服のまゝ終夜雪中に在ることも又或は免る可らず之に反して鳳凰城九連城旅順口等にて先登したるものゝ中には兵卒と雖も敵將の遺したる一枚數十金の毛裘又は繻子の長靴等高價の品を分捕して用ゐるものあり一定せずと雖も大抵は前述の如し

以て遠征者生活の一斑を察すべし。

思想の送答によりて觀察せられたる一月一日

本年の元旦に於ける郵便物を昨年に比すれば左の如しと云ふ。

種別	二十八年一月一日	二十七年一月一日	比較增	增步合
取集	四、五五四、六〇三	二、七〇八、三八一	一、八四六、二二二	割分厘 六、八一
到著	七九〇、三八八	六三九、四〇四	一五〇、九八四	二、三六
配達	九九四、〇九六	七一八、六二二	二七五、四七四	三、八三
差立	四、三〇二、〇六一	二、〇〇八、七一八	二、二九三、三四三	倍 一、一四一
總計	一〇、六四一、一四八	六、〇七五、〇二五	四、五六六、一二三	七、五一

何が故に此くの如くに增したる乎。國家多事にして近遠の征途にある人多きも其一因なるべし。

遠征者の健康

日清事起てより、戰に傷きたるもの十二月十日までに一千一百一人、中五十一人は病院に入りて死し、外に三百卅三人は治療に暇あらずして戰塲に即死したり。而して傷者の治療中に死するもの其割合百人中四人とす。

又遠征者にして通常の病にかゝるものは固より少きにあらざれども、思ひしよりは多からずと云ふ。其病者にして遂に死に至れるもの百人中二人九分。

小學教育

我邦に於ける小學教師の數明治廿六年末に於て總計三

萬五千五百五人、中三十歳以下のもの二萬六百六十八人、三十歳以上にして四十歳未滿のもの一萬五百八十八人、四十歳以上にして五十歳未滿のもの三千三百卅九人、五十歳以上にして六十歳未滿のもの七百七十八人、六十歳以上のもの百三十二人。疑もなく我が小學敎育は壯者の手に由てなされつゝあるなり。

又之が在職時日を見るに、一年に滿たざるもの三千九百四十五人、一年以上にして五年に滿たざるもの一萬四千四百九十四人、五年以上にして十一年に滿たざるもの一萬二千七百六十七人、十一年以上にして十五年に滿たざるもの四千二百九十九人。疑もなく我が小學敎育は全く經驗なきものに由てなされつゝあるにあらざるなり。

而して之を被敎育者の方面より見れば、明治廿五年度に於て學齡兒童七百三十五萬六千七百廿二人、中就學者四百五萬六千二百六十二人、就學比例百分の五十五人一四なれども、廿六年度には學齡兒童七百二十六萬三千二百二人にして、中就學者四百二十六萬五千五百九十人、就學比例百分の五十八人七三となれり。疑もなく我が小學敎育は年を追ふて進みつゝあるなり。謂つべし好傾向と。

兒童成育力の最大なる時期

米國カンサス市の督學が、管下の公立小學生徒の十歳より十八歳に至る六千人の活力を調査したるものに據れば、兒童十歳の時にありては身長身重共に男子を稍勝れりとすれども、十一二歳より十四五歳頃までは女子の方男子より成育速に、而して此期を過ぐれば男子は再び女子に勝りたる成育をなすと。

而して此の男兒にも女兒にも曾て一たびあるべき成育最も速かなる時代は、實に其身躰の異日の行働の爲に營養を貯蓄する時なれば、其智的勞働を最も少なく課せざるべからざる時なりとす。學校敎育が常に兒童を

狀ふて虛弱のものとなすは、多く此時にあることなれば世の父母教師たるもの大に注意せざるべからず。

低等なる實業教育の現狀

實業補習學校の設置せられつゝあるもの、

山形縣　一校。　大阪府　五校。
愛知縣　一校。　山口縣　一校。
熊本縣　一校。　鹿島縣　一校。

徒弟學校の設置せられつゝあるもの、

秋田縣　一校。　大阪府　二校。
京都府　一校。　鹿島縣　一校。

國庫の補助を受くる實業教育所は下の如し。

（學校名）	（年額）圓
愛知縣渥安實業補習學校	二三三、三〇〇
京都市美術工藝學校	二、五〇〇、〇〇〇
同市立染織學校	二、〇〇〇、〇〇〇
富山縣工藝學校	一、六〇〇、〇〇〇
同　縣簡易農學校	八〇〇、〇〇〇
石川縣工業學校	二、〇〇〇、〇〇〇
高知縣簡易農學校	八〇〇、〇〇〇
福井縣簡易農學校	八〇〇、〇〇〇

女子高等師範學校改定規則

女子高等師範學校は其規則を改定せり。改定の要旨は、第一國語漢文歷史家事の諸習時間を増して、理科其他の時間を減じ、且つ外國語を隨意科となしたることなり。第二新に撰科を設け、一科目若くは數科目を撰びて學修せんとするものを自費無月謝にて入學せしめ、之に卒業後の義務を負はしめざることゝしたることとなり。又生徒の定員を百二十人とし、假入學中の費用は之を自辨せしむべくしたると等なり。要するに其門戸の開大と學科の實用とはこの改正をなしたる精神なるべし。

高等師範學校の撰科

高等師範學校は、二月を以て始めて其撰科規則を實行すべしと云ふ。撰科規則とは、尋常師範學校尋常中學校教員たるべき志望者にして、同校に於ける文科若くは理科中の一科目若くは數科目を撰びて學修せんとするや、二年以上四年以下の期限内にて之を學修せしむべき方法を定め

しものたり。而して其卒業者は更に試撿せらるゝことなしに直に敎員免許狀を與へらるべしと。

亦敎師養成の門戶を開大したるもの。

尋常中學校敎科書

現時全國尋常中學校にして採用しつゝある敎科書、倫理科二十一種、國語科六十九種、漢文科六十一種、外國語科百三十九種、歷史科七十四種、地理科五十九種數學科九十二種、博物科五十種、理化學科三十三種、習字科五十一種、畫學科六十五種ありと聞く。何ぞ其多種にして區々ことの甚しきや。

若しかの簡便にして秩序ある學修をなさしめんには、精撰したる敎科書著作の要小少にあらざるなり。

國語の版圖

國語の版圖は或意味に於て人種の勢力を言顯はすことあり。今世界に於ける重なる國語の區域を示せば、

英語凡一億萬人。　露語七千二百萬人。

日耳曼語六千餘萬人。　西班牙語四千八百萬人。

佛語四千六百萬人。　伊太利語三千六百萬人。

土耳其語二千五百萬人。　支那語四億萬人。

印度語一億萬人。　日本語四千萬人。

新年大附錄

家庭雜誌第四十六號に添へらるべき大附錄は、下の如し。

賢母　蘇峯生

『未定』　思軒居士

少年の奈翁　ＫＴ生

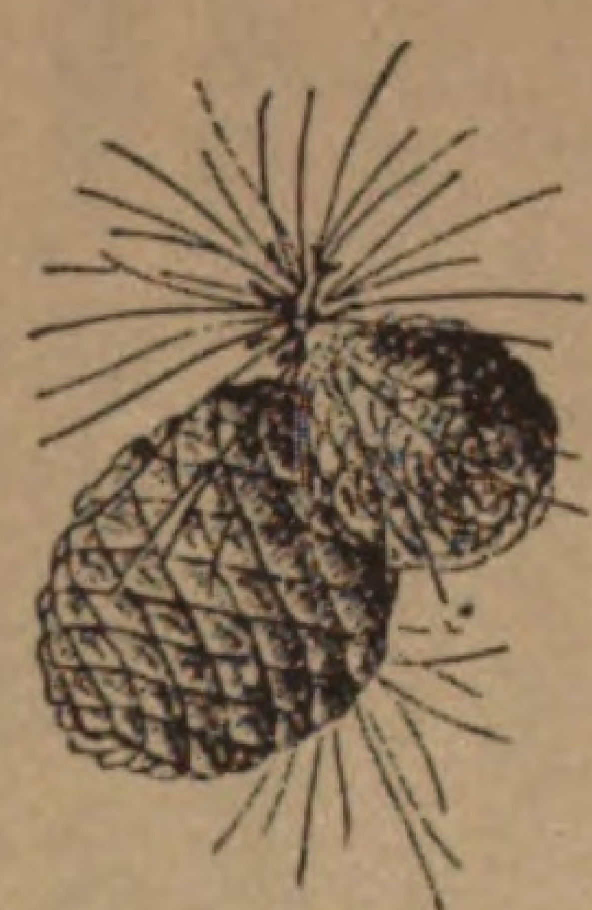
おゆりが故鄕　湖處子

此の馬鹿　嵯峨の屋主人

村の敎師　殘月樓主人

『未定』　藤島武彥

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行